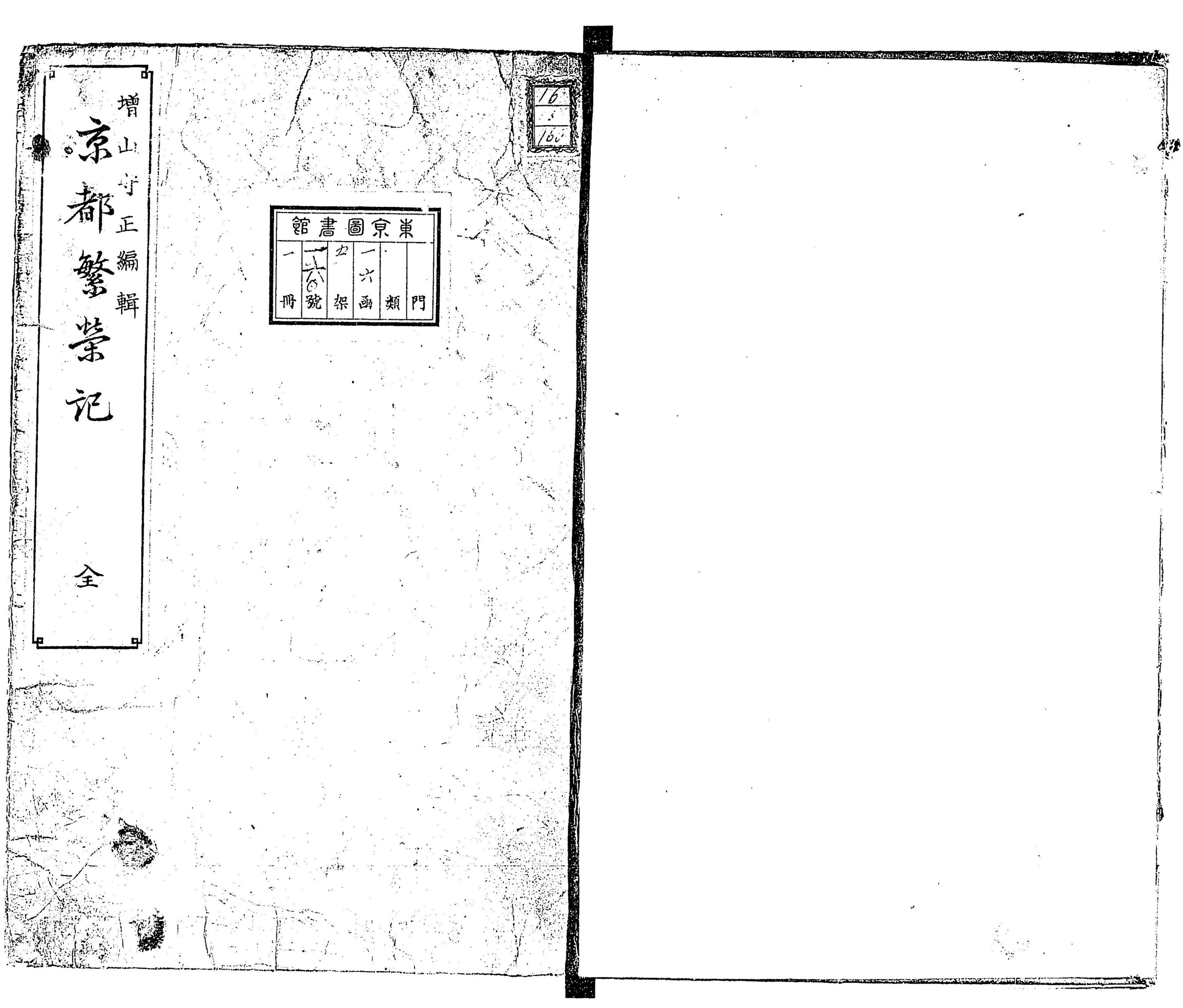


增山守正編輯

京都繁榮記

全

東京圖書館

門	類	函	架	號	冊
		一六	四	一六〇	一

16
16i

J.G.S.4/XXVI.

水滸後傳

增山守正編輯

京都繁昌記 全

東京 靜香園藏

N6354/XXVII.

東唐雜紀

春秋左傳

明記 義堂

丹碧君增山常喜著書與尺足樣者實不下數十種嘗至洛陽之日探龍下之勝蹟與衛之繁榮編為一書名曰京龍繫榮記未及足樣而轉寓於東龍烏鬼忽二十餘年吳余嵗將刊之徵叙於余披讀一過神社佛閣之隆昌東阡北陌之繁盛莫不盡畢焉兼不皆載焉且巷市處處描畫圖画足揭載詩歌非可以添賈餘情亦可謂一種之新體裁也夫可謂地誌

之參考書廿其功蓋淺鮮乎我余與君為莫逆年之久
余聞此盛舉不可不賛国記數語以聊塞其責云

明治二十五年十二月　雪潭走漁

序

古今詩歌連俳に名人多し名所舊跡の
枝葉成愛さるる事　古東京市中長く寄留
せる丹波國增山守正翁を諸書の纂述に練熟な
るその著述せる書籍の數も枚挙に暇なきまで
なれど就中近年東京名勝畫帖の編輯一部六
冊あり網羅遺漏なく好評江湖に轟く東京
会文京都繁榮記を編成せる神社佛閣名所古
跡は勿論新開鐵理駿馬人力車夫等に至る迄
悉く繁榮ならざるなく一々畫工の筆を加へ

詩歌俳句城名などの傍に、掲げ所謂有聲の畫と
無聲の詩を組織し、表裏完備せるものなり
こゝ明治の昭代を仰ぎ観る毫も有益際要なる冊子
なり風雅の道あるを人のこゝろ
あるを推せば此冊子優美なるを愛観せざるべ
からず編纂の丹誠を風雅の篤實なるを賞賞する
なり安中素雷氏まかせくに巻首に辭を乞ふ
明治二十六年二月　羽後國秋田郡在司埜風

半歌閣書

自叙

京都者。三府之一。天造之京。地設之都。山水明媚。風
光佳絶。神社佛閣。頗多名所舊跡。亦不少矣。今夫遊
於此地者。空經徒歷。何之于雲煙過眼。屬之于鏡裏
水月。不鳴一盛。不記一事。豈非昭代一大闕典乎哉。
苟思文字者。不宜不記此繁華。揭此風光。以傳之於
天下。少之於後世也。余資性愚陋。學聞淺薄。然奉生
於昇平之盛時。目都下此隆昌。乃不遑顧其拙劣。遂
編一書。名曰京都繁榮記。諺曰。拙手則巧手之裝飾。
枯木亦山林之盛觀矣。然鼎余此編述。亦安知不爲

巧手之裝飾。山林之盛觀乎哉。是爲序。

明治廿五年十一月上浣。丹波增山守正撰於東京

駿臺鈴木掛僑居。

星洲平戸鄰書

京都繁榮記

凡例

一此書ハ明治十一二年の頃余京都に寓せるの日纂述せる所に係る而して未だ梓に上ぼせに及ばずして十三年の春東京に轉寓せり今夏書を曝せ偶〻籠底より談稿を得たり徒ふ蠹魚ふ飽かしむるを吝み鷄肋の情に堪へず乃ち之を梓に上さんと欲せ然るに物變り星移り既に十年前の起草に於ける今日文明進歩の沿革ふ對し惟ふ陳腐に歸せるのみふ非せ又事實矛盾の齟齬極めて多きを察し同地の知己ふ現時の狀況を問ひ其

報を得て頗る修正を加ふと雖も逐一其事實を質す能はゞ此を以て誤謬尚ほ多からん讀者其れ諸を諒せよ

一巻中知友の風詠を記載し各自繁榮の餘情を擴張せ是れ余編輯一種の新體裁なり

一京都繁榮の勝地甚多し決して此編に留まらゞ余他日親しく其地に臨み現時の盛昌を觀て以て編を續んと欲ス讀者此編標目の鮮少を以て繁榮を盡せりと見做す無くんむ幸甚

凡例終

編者謹識

京都繁榮記

目録

○八阪神社
○北野神社
○清水寺
○知恩院
○人力車夫
○生洲
○東寺
○圓山公園

京都繁榮記目錄 終

○新聞紙
○停車場
○理髪店
○湯屋
○四條磧納涼
○嵐山
○島原

京都繁榮記

丹波　增山守正　編輯

○八阪神社

八阪神社ハ明治以前迄之を祇園と唱へ神道兩部を以て素盞烏尊を假ふ午頭天皇と稱せり本殿ハ南向ふ〜て三座の神を祭れ盞烏尊東ハ稲田姫西ハ五男三女の神とかや按ぜるに字面を以て考きハ祇園ハ地神の園庭と云ふ義精舍ハ精進潔齋の舍と云ふ義ふて畢竟清潔の意共ふ神社ふ用ひて害なきふ似たり然れと雖も古來より祇園と云ひ精舍と呼ぶ大抵佛境寺院を稱せるの例多く神社を呼ぶの例甚稀ふ〜て混雜〜易〜又明治以前牛頭天皇と稱せ〜ハ牛頭天皇曆神辨追加ふ云ふ牛頭とハ華嚴經ふ曰摩羅耶山ふ栴檀香を出せ名つけて牛頭と云ふ

八阪神社

むかしより
いはのしまみ
法人乃
つとふ
八阪の　左京亮　藤原忠起
神社園の春

万斛炎塵夜氣蒸。神輿斜挂幾
毬燈。紅裙翠袖人来去。不見當
年吹火僧。　武藏　関根休莽

天の下てらすかみより須佐のを北
神のみまへをあ代もかもらし
大和　ふる祐順

海をそそぐ水を伝めより来山
羽後　峰風

花のうち北そそぐ水ぞ神ゐる
仝　立

姫ひや人も祇園の花乃春
ちつ春雨

人来人去觀春花。觀至盛時不識遐。
依檻已驚餘暎外淡紅渾映滿樓霞。
東京　寺島蘭癡

祇園祠畔賣茶家。兒女茜裙映晚霞。
社鼓鼕〻人若湧。賽来滿口説繁華。
長門　村田看雨

春ちかよ
みてゝ行乃
ゆる橋の形
山陰　月庵

祭弓八阪の宮北
ゆふあすき
このけて我〻新る
時代の春をを
大和　東玄秋

八宮の祭たれて
五代の春も春る　大和
たふとゝ　芝菊忠

名義集ふ云ふ此の山峰の狀牛頭の如く此の峰中ふ於て栴檀樹を生ず故ふ牛頭と名付く云々大論ふ曰摩梨山を除て栴檀を出さなし白檀ハ熱病を治し赤檀ハ風腫を去る云々按ずるに牛頭峰ハ南天竺の山の號離垢治熱の名香を產せ依て彼の天王の神德を表して牛頭天皇と稱せ（本註に云牛頭ハ譯語也梵語ふ非ず）之を觀きバ牛頭天皇と稱するハ疫熱を治する栴檀產地の山の牛頭ふ似たるを以て素盞烏尊の疫神を治する功驗ふ比較し其產地の名を取て名付たる者ならん峰相記ふ曰吉備歸朝の日牛頭天王を崇め奉るとあり又八阪といふハ北ハ真葛が原南ハ清水阪迄の惣名ふて其中ふ八の阪あり祇園阪長樂寺阪下河原阪法觀寺阪靈山阪山の井阪清水阪等を云へる由

中臣祓抄ふ曰　清和天皇貞觀十八年疫神祟をなして世の人病ふ惱むこと以の外なり曩祖日吉麿洛中の男女を將て六月七日十四日疫神を神泉苑ふ送る然りしより年々かたの如くこつけて祇園會と云ふなり神輿を置く所をむ八阪鄉感神院といふ寺ふれバ神殿も無き程ふ昭宣公の御殿を參らせられて神殿と祇園ハ尋常の殿舍造りふり是を精舍と云ふ後人又祇園の名を加へけりと云々按ずるに牛頭天皇の稱を廢し八阪の神社ふ改號ハ地境適當の名義と云ふ歟境内接社末社多く其數枚擧ふ遑あらざるなり

例祭ハ舊曆六月七日と十四日の兩日ふして鉾を出し山を出し引物を出せ其行列甲冑を擐きたる者數十人旗幟を耀し槍を振ひ威風凜々前路を開く恰も維新前の陣押の狀の如し神輿ハ素盞烏尊ハ王子稻田姫の三つなり氏子の面々齊々肅々之を保護

き其盛言ふ可らぬ古句ふ「松原を西へ入るさや月の鉾」連綿陸續通行の美觀を見んと街頭ふ填咽ある老若男女雲來蝟集雜遝錐を立るの地も有らぬ押しつ押さきつ人の波揉合ふ汗も炙晴きと化粧ふ婦人の白粉も斑ふ剥げて鬢鏡出して粧ふ遑なく藥鑵頭の兀親父人ふハ押き日ふ照き内より酒の刺戟ゑる汗の烟を頭ふたてゝ最ど苦しむ者も多あり往來一時閉塞し人力車夫も他ふ走り犬も怖きて退縮ゑ古句に「祇園會や牛ふ着けたる菓子袋」其繁昌推て知るべし所ハ名に負ふ祇園町天人仙女の天降る如き風情の美娼佳妓沈魚落鴈閉月羞花の嬋娟ふ達麼も笑ひ訶葉も破顔微笑せん玉を欺く藝的等顔ゞ白粉ゝ白粉ゝ顔ゞ花ゞ藝妓ゝ藝妓ゞ花ゝ藝妓ゞ花に似るでふ花ゞ藝妓に似るふりと六郎蓮花の故事顔を誇り高ぶる別品ら綺羅錦繡ふ身を飾り我も我もと金蓮歩揺十目百目嚴乎たる傾城傾國窈窕の姿ふ見取き迷ひ入る心い空へ有頂天飛上りたる遊客冶郎神を慕ふゝ妓を戀ふゝ混沌未分の顔色も合せて祭の大繁昌人の波捲く所以なり

抑八坂ハ名ふし負ふ古人の名句「布團着て寢たる姿や東山」其名山の麓ふて接社末社の數多く總括ゑたる一境地其西門ハ祇園町四條通の繁昌地新京極の盛境と氣脈通ぜる要地ふゑて真ふ掎角の勢あり參詣人ハ絡繹として絶間無く來るも有きバ去るも有り肩摩轂擊路を選ぶに遑あらぬ元來東山ハ大抵寺院多くして神社ハ殆んど此境と其他一二ふ止まきど多勢ふ無勢の衰微なく拍手鈴聲人毎ふ誠の花を顯ハして高天の原ふ神留り六根清淨内外清淨「トホカミエミタメ」唱へつゝ禮拜頓首ゑる姿神

人一致と見えにけり

南正面ふ石の大華表あり往時路を挾みて二軒の茶屋あり東を中村屋と云ひ西を藤屋と唱ふ世ふ之を總稱して二軒茶屋と呼び互ふ其盛を競ひしが中村屋ハ遂日繁榮し藤屋ハ遂ふ零落し自由亭と稱し西洋料理の主人代り住みしが暫時ふして閉店し今ハ半井先生が一大醫院を設置せられ起死回生の偉績世ふ轟けり其南隣に當て拙尾といふ茶店あり當時頗る繁昌し來客陸續踵を接ぐ中に就て中村屋の奥庭に翠樹茂林あり亭其中ふ在り幽邃清絶俗塵を絶も更ふ一層の佳境と云ふべし此ふ於て遊客輻湊絶るなし花翠月雪四季共ふ良し詩賦ふ來るあり酒肉に來るあり妓を携るあり茶を喫もるあり絲竹管絃歌舞吹彈書画碁將棋ふ至る迄席貸し辭もる所無し山海の珍味川澤の住肴聚めざるなく具へざるなく蜀黍呉膾八百萬遠き西洋料理まで命ぜバ成り呼ぶ時ハ應ず其速なる真ふ影響の如し粹も無粹も雅も俗も合せて此亭の一大繁昌なる所以なり

宮殿聳雲八阪園。朝參夜賽往來繁。威靈逐疫々無影。利益生財々有痕。一面負山爭勝劣。四方圍寺競軒轅。祭神三座人知否。主是中央素盞尊。　増山丹蓉

四條正面聳朱門。八阪神宮垂跡尊。鳴鈴參客禱三德。拍手詣人清六根。酒旆飄々飜境域。櫻花簇々滿庭垣。此是東山登進蘆。千秋勝地舊祇園。　仝　上

この神の崎き光をあふぐと

八阪越づ人そまれなる　塔の中ふ

世の人を悪ふ惑ふ清水丸　丹蓉

仏のおそ形安おの邪　仝　上

神垣ふ狂一のや梅の花　仝　上

えやみを八拂ふ猿或ふ四才の人　仝　上

八阪ふ祭りて集ふ市　社

霊驗昭々萬古轟。朝參暮賽客縱横。秋風宜醉前庭月。春日堪吟後圃櫻。

檐際懸鈴無絶響。社頭拍手有餘聲。

人家十萬都城裏。祭禮奔波上下京。　増山丹蓉

なきも時きてこそ仰ぎ名は高き

北野の社の梅のまさかりを

西京　李家隆介

その神のなこそ愛しもうへかりや

雪ぬる枝ぬ匂ふ梅の香

山城　篠林　昇

雪ぬる中野北宮の廣前に

神のめぐみまさる梅匂ふ

西京　足田孝子

天満る香や

庄神の

梅ぬ香

西京　稲雄

東京　宮田玉子

ちるもいきてこそ世俗はまさまさ

ちるもいきて世の神とあがめ

山城　木村昇雨

鴨水春聲夜不驚。

英魂千載護西京。

我来梅下知公意。

只見光風霽月明。

武藏　関根休莽

梅ぬき

仝　上

みやしろもまさまさ

北野北杜の

梅咲ふり

東京　宮田玉子

梅の香

仝

2

依微殘月在低枝。誰識天涯孤客悲。杜宇一聲何處去。菅公祠畔數歸期。

武藏　關根休莽

咲梅の下吹風ふ

ひろまさ

きさふ北野北

菅北ぬ

山城　久野吉碩

風ふ香の

廣前ぬ梅咲ぬ

東京　梅亭

文琴

○北野神社

誠ハ天の道なり之を誠ふるハ人の道なりとハ中庸の金言心ぞに誠の道に叶ひなバ祈らずとても神や守らんハ世の人口に膾炙せる道真公の御咏吟誠の徳ハ人間ハ愚う天地も神明も感動有て積善の餘慶昭々曇り無く千歳の下人望の日々に新に彌榮ふ其確證ハ老若男女貧富童幼貴賤都鄙遠近隨喜子の親を慕ふが如く風霜雨雪寒暑朝暮の厭ひなく我も々々と參詣の多きを以て知るべきなり抑北野ハ　王城の乾ふ當り天曆年中聖廟を遷し營まゝと云ふ殿堂の高大門廡の壯麗益以て其信向を增さに足る青銅或ハ鐵製の釣燈籠ハ林の如く石燈籠ハ道を挾で垣の如く園に滿たる梅林ハ清淺の水有ざるも月に疎影横斜の風姿を地上ふ印し庭に茂きる松の樹ハ大夫を賜ふの君無く千歳依然翠色の其節操を失ハぬ是き此境の佳觀なり若し夫き東風氷を解き蟄蟲始て振く時ハ梅樹一面花を開き清潔馥郁奇香を放ち更に一層の神德を添るが如し彼きに賽錢を投ぜる者あり此に拍手稽顙ぜる者あり甲に本堂を循環ぜる者あり乙に繪馬堂を凝視ぜる者あり門前肆店軒を連ね甍を比ぶ酒茶を賣るあり魚肉を鬻ぐあり温飩蕎麥を商ふあり自ら一繁昌の市を爲ぜ是の如きの盛大ハ皆是き誠の花の德斯る誠の菅公も浮雲の月を蔽ふ如き冤罪受て痛ハしや忽然筑紫へ左遷の身流さき給ふ三年目延喜三年二月廿五日筑前太宰府配處にて嵐の花と散り給ふ憐と云ふも愚なり世に傳へぜる詩歌を拾ひて左に掲ぐ左遷の時　寛平法皇に捧げ奉られて

流れ行く我ハ藻屑となりぬ共君柵とゞまりて留めよ

度會春彦所謂白太夫に示さる

見る石の面に物も書ぬなり竹の楊枝も遣ハざりもに

西轅の御述懐に

自從勅使驅將去父子一時五處離口不能言眼中血俯仰天神與地祇

紅梅殿を立出で御愛樹の梅を見給ひて

東風吹て匂ひをこせよ梅の花主無し迚春な忘れそ

抑菅公ハ幼より志て文學を好ませらき穎悟敏才群ふ秀で凡ふ拔く十一歳の時月下の雪梅を見給ひて

月耀如晴雪梅花似照星可憐金鏡轉庭上玉房馨

詩人輻湊踵を接ぎ其祈望する處百人百様一ならぐ寃を訴る者あり書に賚する者あり學事疾病福祿富貴其數枚舉に遑あらぐ

毎月廿五日ハ詠祭の當日たり群參雲の如く雑遝波の如く繪馬堂の奉額ハ山の如く夫き堆く新ハ舊を蔽ふて懸く額面の萬藝ハ花の如く夫き美しく今ハ古を壓て掲ぐ詩歌連俳書画の類其精神を揮ひ其膽力を張ざるあし中に就て書跡を爭ひ筆頭を競ふ所謂真ハ立つぐ如く行ハ行くぐ如く草ハ走るぐ如く從容波啄變化出没空中の筆意懸針垂露の妙真に木に入るの勢ひあり義之も百歩を讓て走り弘法も筆を投て逃ぐ嗚呼文明の棟梁に非んむ何そ是の如き妙筆を堆懸するを得んや運筆の巨擘に非んむ何そ是の如き秀跡を簇掲するを得んや盛德の真實聖廟の美稱豈虚假ならんや苟も此の聖廟ふ詣る者平素より心だにの聖句を體し我身ふ不適當なる富貴福達利祿を求めぞして孜々汲々と勤學し至誠を以て主となさバ則所謂る學ぶや祿其中に

在て富貴福利や財産貨寶勉めざして中り思ハぬして得るの慶幸有るべき歟彼の董仲舒先生の仁人ハ其誼を正しうして其利を謀らず其道を明ふして其功を計らざる人事の本分を盡さべし敢て妄に非理の福非義の富貴を祈ること勿れ

命哉盛德忽逢寃。遠謫天涯伴峽猿。接靜鐘澄忘旅意。雲霧晴て梅飛櫻謝表離魂。夢中應侍清涼殿。心裏常関拔擢恩。不管浮雲遮日月。忠誠萬古照乾坤。　増山丹蓉

けふの月　丹蓉

俄受寃名天地瞋。罪雲晴處月無塵。一榮一落觀浮世。ふ茅ふる大末五子五分悟夢身。絶類奇文々似錦。離倫妙筆々如神。　そ〻し

斯公盛德何由識。日夜奔波拜廟人。　仝　上

はる〳〵と心つくしまさらへ　沖の筆ふ屋せさりより　増山丹蓉

此公才德冠日東。可否献替絶代忠。博聞强記無比類。就中妙筆奪天工。裴延初見訝樂天。良香每道是神童。明月易蔽花易散。可憫讒誣汚厥躬。亢龍有悔公所識。殊惜滿損不折衷。日夜精勤歸水泡。清行切諫屬無功。一時寃罪毛髮白。五處訣別血涙紅。人間萬事塞翁馬。用成句陰德陽報追贈豐。聖廟巍然聳北野。千歲猶起誠德風。回頭薄命還多福。寒梅雪松理皆同。君不見盤根錯節介利器。公名特出大難中。　増山丹蓉

○清水寺

都名所圖會ふ曰音羽山清水寺の本尊十一面千手千眼の觀世音菩薩脇士ハ毘沙門天地藏菩薩なり　中略　延曆廿四年ふ田村丸太政官府の宣旨を蒙りて堂塔を建立し勅願所となし又大同二年紫宸殿を給ひて伽藍となし觀音寺を改めて清水寺と號せりと云々　訣地ハ頗る有名の靈場ふして所ハ名ふ負ふ東山の絶勝遥ふ之を眺きバ堂塔樓閣林間ふ出没し其幽邃言ふ可からず舞臺ハ數丈の高きふ架し臺下を臨めハ騰震ふ程の高臺なり臺の麓ふ櫻林あり花時殊ふ清觀なり其傍ふ三條の懸瀑あり四時共ふ增減なく其水ハ細小なりといへ共其轟名ハ甚巨大なり又路傍一層低き所ふ於て新ふ一の飛泉を設く俗に之を吹上の水といふ飛泉一丈左右夏日客來て清涼を資る之ふ環して亭を設け客

清水寺

數杵鐘聲秋更深。
寺門人絶月沈々。
丹精持戒清如水。
渴仰大悲觀世音。

武藏 関根休莽

山妹 孤仙

唯人の呵ふくも
久し清水の
おもゝ北ちきの

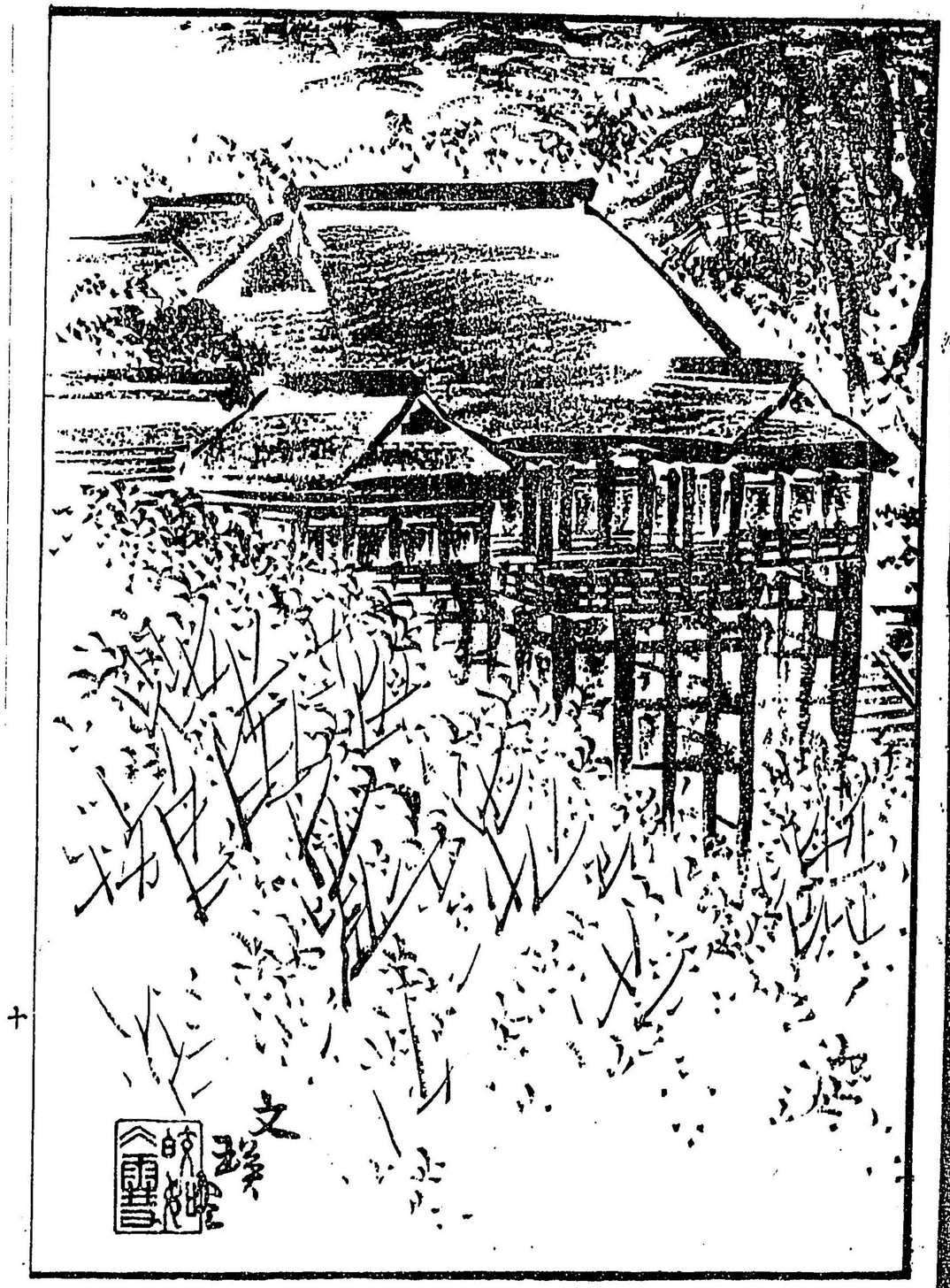
東京 平松香海

中しゐ精進
あを楊

翌夏 嗌風

風薫る舞毒中
ちゝ物わすれ

全 上



を待して財利を射る謂つべし一種の清涼地ふして酒茶産業の吹上場なりと當寺觀音の咏歌ハ

松風や音羽の瀧の清水を結ぶ心ハ涼しかるらん

西國順禮の道者衆過去ゝ後生ゝ現在ゝ佛の爲ゝ我ゞ爲ゝ何の望ゝ分らぬと床几ふ腰を打かけて一心不亂咏歌をバ唱ふもあきバ普門品觀音經を讀むもあり合掌禮拜南無歸命光明返照十方世界念佛衆生攝取不捨謄に銘して信向き堂中の奉額ハ爛燦として錦花の如く佛前の香氣ハ馥郁として蘭麝ふ似たり而して志願成達を期きるの餘昔日ハ舞臺を飛下して身體を毀傷して又ハ非命ふ死きる者あり嗚呼其頑愚亦甚しく抑吉凶禍福の來る天災あり人事あり所謂天の作せる災ハ猶違くべし自ら作せる禍ハ逭るべからざの道理ふて過分の富貴欲望を妄ふ强願きべからに唯反省勉强ふ如くべからんば「フランキリン」氏遺教の如く富を得る道の易くして平なるハ市に行く道の如く唯二言を以て之を盡せり働と儉約とをり時を費き勿き金を費き勿き此の二つの者を巧ふ用ふべし働と儉約とを棄きバ成るべき事なし此の二つの者を守きバ成ざる事なし少年の男子既ふ働きて且儉約ならバ此外ふ富を助成き者ハ綿密と正直の二箇條なり勉强ハ恰も幸福を生む母の如し天ハ萬物を人ふ與へぎして働ふ與ふる者なり今日といふ其今日の内ふ働くべし明日の故障ハ測るべからず汝若し人の家來となつて其主人より惰氣者と叱らきなバ是ふ赤面せざるやさきバ今汝ハ人の家來ふ非ぎして自身の主人なり自ら其懈るを咎めて自ら是ふ赤面せざる可らずと真ふ金言なり然るに人々勉强を度外視して唯徒らふ觀音薩埵ふ洪

福を祈るとも何の益あらん觀音薩埵千手千眼あるとても數限りなき億兆の人の禍福を與奪まる權利所有の理あらんや謂つ〻〜思ハざるの甚〜き者なりと此理を知らば數丈より飛で利益や感應の有ると思ふハ愚蒙なり今文明の世となりて此の舊弊を禁ぜらき臺下の周圍ふ垣を環らして健康衛生の保護ある慈仁の至りと謂つ〻〜

本堂の後ふ當て地主權現と稱まる社あり本尊ハ大巳貴尊ふして例祭ハ四月九日の由古昔より櫻の名所ふして開花爛熳の時ふ當て滿枝濃雲を吐き芳菲清艶言ふ〻からば詩客文人精神を拋て錦繡を綴り金玉を吐き野暮醉漢無能を表して大酒を飲み大飯を食ふ粋と無粋と智愚雅俗合せて一大繁昌をあらハ所以なり

門前肆店ふ鐚錢を賣る者處々ふあり僕其故を問ふ答て曰銅錢を佛ふ献ぜるを吝て鐚錢十枚ふ換へ鐚錢三枚を以て舊例の如く賽錢となまと云ふ僕之を聞き膝を擊て歎じて曰嗚呼是き何といふ事そや〻〜抑近來物價騰貴し古昔に比まきバ價聲十倍せり然則從前の一文錢ハ則當時の十文錢なり然るに鐚錢三枚を以てまる者其鄙劣甚〜く其吝嗇恥〻きの至あり斯の如き卑屈ふる心を以て何福を祈り何樂を得んと欲まるや真ふ抱腹絶倒ふ堪ざるあり

三條懸瀑盛名通。千手觀音轟日東。法脉長傳清水寺。殿堂高聳梵王宮。菩提心起詠歌際。煩惱情消經韻中。飛下高臺眞可笑。禁令今日掃頑風。　増山丹蓉

音羽山頭奇構堂。巍〻高聳巨靈場。一軀佛體具千手。十丈舞臺轟四方。詣客詠歌清俗談。僧家經韻洗塵腸。三條懸瀑時無絶。清水寺稱是適當。　仝　上

時はまと心の渴仗ハんと清あちふ人の那事まる　埃ふ心者ふ口あこの那　丹蓉

妄の人をあまおく眩ふ清水の佛の名を毎あ那　仝　上　海〜きやの法を拂ふ泡の巷　仝　上

知恩院

例年の通り

寂むよりも思ひ見る　日後　峯風

花の名残つれもやさしあかつきも　長門

かぐの松こそは紫みあり　お四季

寺高よりの古像多き鐘此村も　大和

よに高くと空へなるこの系　みなれ

年毎ふ事をむくゆる言らかふ大和

けりのうきをひくく方の孫　東　友秋

大木大木　小幸　芳次郎

雲外鐘聲響半空。規模擬古梵

王宮。須知淨土根元地。華頂

山高洛水東。

山城　堀口主耕

大谷の佛法の殘此

寄きけば

そろそろ春も

ほれゆくこころ

仝　之

○知恩院

華頂山大谷寺知恩教院ハ八阪神祠の東北ニ隣る浄土宗總本寺にして圓光大師の開基なり殿堂の高大山門の壯麗境地の廣豁精々細々其巧を盡さゞる無し甚しきハ至てハ往來脚下の摩軋よりの如き聲を發せる板縁ありて鶯の廊下と唱ふと聞く此一斑を以て其全豹を表ぜべきあり

本堂南檐の裏面東方の桶間に一傘を挾めり是れ左甚五郎の遺忘なりと唱へ又ハ雄譽上人より濡髪童子ニ與へらきし傘なりとも云ふ孰れ是なるを知ぜと雖も世上ニ名高き傘なり

本堂の東南ニ一の巨鐘あり高さ一丈八尺徑九尺厚さ九寸五分銘六字名號靈巖上人の筆寛永年中ニ之を鑄て延寶六年十二月十五日ニ供養有りし由圓光大師建暦二年正月廿五日午の刻法壽八十年ニて遷化あり是よりして例年正月十九日より一七日の間大法會あり勅命ニ因て御忌と稱せとかや其法會にのみ其鐘を撞きて常時ハ用ひぜと聞く其鐘聲高く響きて遠地ニ達せ古人の句ニ逢坂の關も越えゝり御忌の鐘其鳴韻の遠きニ及ぶ推て知るべきなり

知恩教院聳林頭。大殿巨鐘何絶尤。老若覺迷奇傳長。丹誉
來煩惱夢。女男仰去真如月。決談有實利生　慰みゝあふき揚るや　〃
厚。念佛無虛功德優。遺傘奇傳長不朽。人々　忠の雲なびくや　〃
爭說幾千秋。　　増山丹蓉　大鉾のそとふまねを也　〃

かちこのさの軒ニ秋きる大寺此名こそハ安〳〵ニ傳り寄きれ　増山丹西
誉の雲寺ニ赤かニ板の写純鐘きも寺乃ハさをとそ知る　〃
咲敬ふちの楊ハさあかりニ秋しさきの雲曳く心地〳〵そ　〃
名も高く佛青ふく〳〵き大鐘ハ國〳〵かけて傳ふ流りり　〃
勝地高岡幾度攀。樓門屹立絶塵寰。珍鐘聲達都城外。奇傘擧轉僻境間。迷客逡巡成
佛道。悟僧透了世情関。櫻雲爛熳埋堂殿。好是喚爲華頂山。　増山丹蓉

人力車

車屋ふ

捨ハ山れ乍り

心太

羽後　嗟風

走りも車を

ゑ吉き

くかちゑ

かちとる

ゑ吉ゑ

ゑ吉ゑ世

ゑりゑり

京良

大東亜慶

拾捨の苦汗

くゑ一　壺橋義

仝上

箬笠芒鞋路幾巡。

殷轔蹈破六街

塵。勞々何日

安生計。八

口之家

託二

輪。

武藏

関根休莽

○人力車

懐手靦然愚の如く魯の如く傳車場地ふ陳を張り相屯して客を待つ其狀各自一ならば軾ふ凭りて眠るものあり欠をするものあり不景氣を談ずるものあり鵜の眼鷹の眼客を見て旦那戻り車あり廉價參らん〳〵と喋々嘖々呼び叫ぶ牛馬ふ似たる無知の態無氣力の業到底卑屈ふ違ハねど其因る處を原ぬれバ孝の爲ふ引く者あり産を失ふて然る者あり運動の爲ふをする者あり酒食の爲ふをする者あり其差等一ならず賤しむべきが如しと雖も自由權利の生活ハ游手浮食や尸位素餐怠惰の人ふ較きバ人賴みせず腕に食む潔を誇るに足りぬべし

衆客之ふ乘る其原因亦一ならず急用を辨ずるが爲ふをする者あり重擔を省くが爲ふをするあり遊行の爲あり買妓の爲あり急雨の爲あり大醉の爲あり或ハ佳人を伴ひて人ふ誇るが爲ふをする者あり千差萬別種々無量轔々轟々轣々轆々東山西嶺奔走烟の如く南神北佛經緯織るが如しハイ御免やを〳〵と土砂塵埃を駈立て蹶立て前ふ群る衆客を左ふ轉し右ふ退け一目參の早走り人が牽くのゝ車が舞ふゝ車が推て車夫が飛ぶゝ人車一枚一機活韋陀天三舎の人力車乘客車上ふ瞠焉たり

遊里に趣く一客あり車夫ふ戯きて曰汝終日勉强を會計必ず中るべし然りと雖も文明に斯く筋骨のみを勞してハ一文不通鼻先の商賣往來一卷も讀むべからずと嘲きバ車夫恬として是き旦那君ハ大ふ誤きり夢ハ逆夢世ハ逆樣仰せの如く我々ハ商賣往來顛倒し往來商賣致せ共虎と見たきバ石ふ立つ誠一つの志折きバ撓きバ勉めおむ彼の諺の昨日ハ旦那今日ハ轎舁反對し

私迚も人ふ人力車牽せまゝ者ともいへば旦那さん君も淫亂放蕩
ー修業に油斷ー遊ばさば失敬ながら他日又安ぞ車夫たらざる
を知らきんや御用心を遊ばせと云へば乘客慙づといふ是に付
けても世の中ハ車馬轎舟の樂みも身の分限ふ相應ー必ず節を
越えぬやう中和の德を養ふて沈滯坎坷の覆轍を蹈ざる事を要
きべー敢て妄ふ娼妓ふ耽り花車の口車ふ乘せらきて所謂店ハ
燈籠内證ハ火の車なる三界の火宅の中の極烈の境ふ陷て囊中
總て叔融ふ逢ふのみあゝ骨疼き楊梅瘡の類燒ふ人力車ふも
劣りたる片輪車とおる勿き
一客あり一婦を同車せり正ゝ權ゝ將た娼妓ゝ其實を知らぎと
雖も風姿皎潔塵埃を絶ー花顔愛を盈ー明眸秋水を含む恰も明
月山頭ふ現ー美玉夜光を發つが如く轔々然と馳來る路傍ふ田
舍漢と覺ーき人あり眉を垂き目を細くー涎を流ーて之を羨み
獨語ーて歎ーて曰く嗚呼彼きも人なり我も亦人ぁり何ぞ彼我
懸隔の甚ーき吾曹毎日星を戴き露を蹈み糞桶を擔ひ薪炭を負
ひ雜飯咽ふ鯁ー草鞋足を嚙み櫛風沐雨流汗淋漓唯耕耘是れ事
とも然るに誂的何者ぞ身にハ美服を輝かー天人然たる佳人を
伴ひ足おく飛で天涯に到る榮華ふ比較せむ僕等ゞ如き賤民ハ
真ふ禽獸啻ならぎ生き甲斐なーと歎息も此傍ふ一翁あり乾坤
世界丸呑の驕慢の氣ハ天を衝き田夫の歎息聞咎め灼々然たる
赤頭を一振ー振一振ーて説て曰く嗚呼是れ足下誤きり抑人間
貧福貴賤の別あるハ皆悉く勉强の精粗勤惰に是因きり孔聖曰
く學ぶや祿其中にあり昌黎曰く業ハ勤むるふ精ーく嬉むふ荒
むと足下佳人の同車を羨み流涎三尺魂飛び腰脱く何ぞ痴騃の

甚しきや何ぞ奮發勉強せざる足下彼の文明開化を知るや所謂開化ハ頭ふ洋帽を戴き身に洋服を纏ひ手ふ洋傘を握り足に洋履を着け軋々然たるを云ふの謂ひふ非ぎ口に洋酒洋烟を喫し頭髪を雜ぎ髭鬚を延し關羽然たるの狀を云ふふ非ぎ心其文學に明なるを文明と云ひ心其實德ふ化せるを開化と云ふ抑人皆自由の權あり世悉く自主の利あり自已の權利を研き出せに非んぞ沈滯坎坷生涯遂に貧賤を免れぎ足下徒に佳人の同車を羨むハ恰も隣の寶を數へ淵に立て魚を羨むが如し忽ち來り忽ち去る鏡花水月寸影を留めぎ毫釐の益も無るべし唯速に研窮し富貴榮華の身とあらむ彼の人力車ハ未だ愚ら道路叱咤の馬車の内楊貴妃三舍の美婦人と同車の愉快も得らるべし卿勤めよと驕慢の天狗然たる鼻高く賓頭盧然たる赤頭を一振り振て説諭せり

世人賤しむ勿れ唯車夫々々と熱汗淋漓筋骨を苦しめ盛暑嚴寒を凌ぎて四方ふ奔馳し腕ふ食み脚ふ食む駸々乎たる勉強力彼の遊手浮食無職の徒之ふ對して豈宜しく恥る所無る亟けんや

因ふ記す人力車の製作ハ東京呉服町ふ住居せし鈴木德次郎といふ人の發明ふて明治三四年の頃より始まると聞けり

西東多もうしこも人車
樣減ることなく發達ひて
埼山守正

走顔や歳も秋まぬ袖ちゆく　丹雲

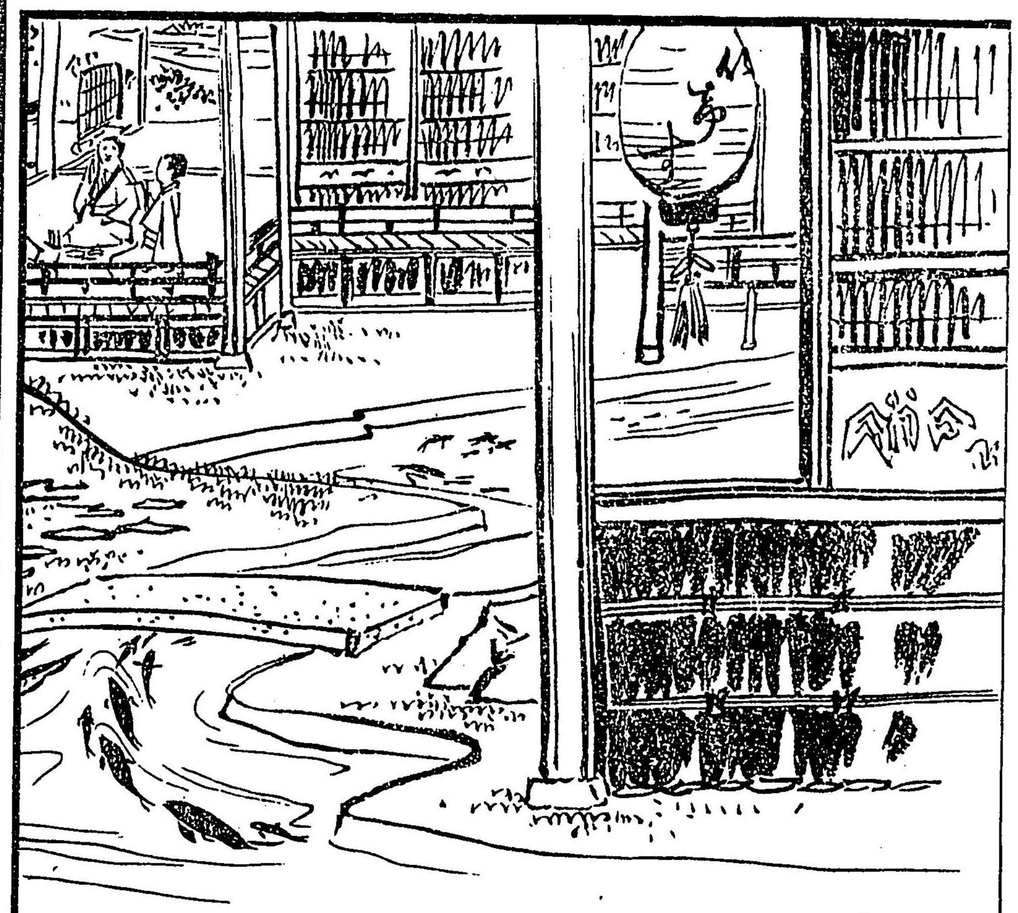
汗の玉移さして曳く車の跡　仝　立

東走西馳甚苦辛。終生唯伴一車輪。大寒酷暑登高日。猛雨烈風行遠晨。氣血循環康健體。語言圓轉自由身。

馬牛賤役君休笑。猶勝優游徒食人。　增山丹蓉

蝟集停場人力車。叫廉要客甚喧如。烈風輕轆開堆雪。猛雨殷輪蹴漲淤。蹈月遲歸昏定後。戴星早出日昇初。休言牛馬勞相似。便是京都昌盛餘。　仝　上

生まれと妙めふせそいたらに
まを束ねをる人ふまきれり　仝　立



生洲

おもきよ
生洲めしちよ
入れらきて
鯉とかる世や
くるあらく
まし

山林　森慎男

月きし
よすのふ鯉の
ちかる音
あ京　青芥

纖々垂柳碧川涯。
日夜醉歌人倚臺。
鄙鯉鰻鰷極鮮美。
咄嗟羮膾滿盤堆。

東京　水原三酉

せきいきて
生洲名高き
加茂川の
あよひれある
青の居鉢

大和
西園周平

うきしほ
うきのかや
いのちのこん
いけにてそふ名も
たのまれにけりて

大和　大布延慶

ささはれて
生洲に遊ぶ
東京の船
お後　喰風

法て在る
魚肉料理屋
夏中教
羽後
喰風

○生洲

天ふ鳶飛ぬ日あるも魚池ふ躍らぬ日なき繁昌ハ藤屋あり生龜あり佐野新等ふ至る迄其數枚舉ふ遑あらぎ池ふ滿たる鯉魚の數億のみならぬ生養ふ加へて紅鯉の美色あり此ふ蓋せし鰕の籠あり彼ふ鎖せし鰻鱺の箱あり河生湖産の微魚雜魚合せて池ふ充滿せ衆客亭ふ入來り池の滿魚ふ驚愕し胸腹脹きて氣い呑る逍遥自適の大小魚其景況い一ならぶ喰喁餌を乞ふもあり活潑撥剌然として喜悦り躍り上るあり逐ふあり逃るあり狂ふあり浮くあり沈むあり半沈半浮鰭を延ぶ尾を居ゑ氣をむ張るもあり底ふ動らぶ靜止して存養工夫めけるあり雜遝尾を接ぎ頭鼻互ふ撲つ洋々焉も園々焉も子産ならねど一齊ふ皆其所を得る魚ハ是き此亭の壯觀あり手を拍てバ應じ命ぜきバ成る或ハ膾ふし或ハ炮ふ或ハ燔き或ハ炙り或ハ烹或ハ汁ふも刺身筒切生作り唯客の命ぜる所ふ隨ひて酒ふ伴ひ飯ふ副ひ下戸も上戸も中戸迄皆其快を得ざるあく魚肉の新鮮調理の精巧塩梅の加減奇と呼び妙と呼ぶざる無し嗚呼都會ふ非んむ此の如き魚獄を設る能ハぶ都人士ふ非んバ常ふ此妙味を姿ふもる能ハぶ是き亦京都繁榮の大魚獄ともいふべき乎

川魚のあるか中ふも鯉鮒ハ數距あく池ゆみちけり　增山丹蓉

今知れぬ生洲の魚のこゝかあさよ舌ふ思ひやられて　仝　立

苦ひし生洲のもとの味みハ誘も絶ぬ魚の活ひ　仝　立

天ふ雲飛ぬ日あるも魚池ふ躍らぬ日なき繁昌ハ藤屋あり　仝　立

數家魚獄樹旌旗。客去客來無絶時。酒店屋陳都府側。食樓櫛比鴨川湄。塩梅易氏避三舍。調理庖丁逃九逵。生養湖鱗真不億。滿池如鯉々如池。　增山丹蓉

知否昇平一大奇。是鰻是鯉伴瓊巵。汁羮炮炙皆如意。軒會燔熬悉適宜。玉露金風吟月處。絳霞黄鳥嘯花時。庭中潑剌肥魚躍。想起文王園囿池。　仝　上

東寺

古寺巍然心地清。
五層塔外夕暉明。
高僧垂業千秋後。
今日猶榮護國名。

山城　乾玉溪

見渡せば
かゝる
春の花　　白峰

冨山の高日か
ひらく　　仝
牡丹の形

斷碧零金老樹横。舊京光
景異新京。捻香人去佛燈
暗。讀碣聲交暮磬聲。

武藏　關根休葊

松風や
さゝふのりのこゝろ
ぎつ　　秀角

今は程とこの君の代を安のれと
祈る心をそうしとうりなれ

大和　芝　菖忠

○東寺

都名所圖會ふ曰八幡山教王護國寺秘密傳法院東寺又左大宮の西八條の南ふあり真言宗の源ふして開祖ハ弘法大師舊此地ハ大内裏の鴻臚館にして來朝の賓客ふ儲る所あり漢朝の鴻臚館を不空三藏ふ給ひて精舍を營みし其例に弘仁四年左寺を空海ふ給ひ右寺を守敏に給ふ 中略 弘安七年ふ紀州高野山を賜ひて金剛峰寺を建立し仁明帝の御宇承和二年三月廿一日六十二歳にして紀州高野山ふて入定あり其後延喜廿一年ふ弘法大師と諡を宣下し給へりとあり毎月廿一日其例祭たり 樓閣の壯麗堂塔の高大境地の廣豁是れ則當寺の全體ふり中ふ就て五層の塔ハ亭々として天を突く抑し此境山嶽ふ副ハゞ平地上突出の塔ふ屬せるを以て四方現出殊ふ遠望の目的たり

若し夫れ廿一日ハ四方諸人雲來蝟集往来絡繹踵を接ぎ錐を立るの地も有らゞ骨董家故衣店の多きハ星の如く赤飯の赤く温飩の白く菓子の堆きハ山の如く酒の多きハ泉の如く盆栽花の爛熳たるハ正ふ十二分の春を領し常磐木の青々たるハ四時翠色を占む此ふ齒藥賣の刀技を振ひ又ハ手拍子を以て齒を拔くあり彼に弄玉師の奇術を演し瓢簞より駒を飛せあり説經祭文難波節種々の觀物機關等ふ至るまで人山人海廣豁の境地も人の波をふし終日山内徘徊して雜遝の聲囂々たり

西鶴五人のあつまる事

見性煉磨尤苦辛。筆才況　祖師功德逐年新。修得宗門即佛身。萬畝周垣餘地域。五層飛塔削天垠。無言袖裏旋機密。阿字胸中轉法輪。別有風流才筆妙。千秋花發四時春。　仝　上

一ちふ人の淋ちつ場山吉正　又逐年新。奇方施去菩提訣。秘密消来煩惱塵。西寺

説義をしつふ法人　仝　上　目今無影跡。當山現在有

涼しき世界のしるし　丹青　精神。燈火凜然吹不滅。弘　法輪。別有風流才筆妙。千

生ちの秘密涼しき世界の形　仝　上　法不虛弘法人。增山丹蓉　秋花發四時春。　仝　上

圓山

やまとけく
山やまとあり
南山の
形の美妙
言ふ法也
塲の勝

河内　南西彦

安養寺邊尤快哉。風光好是上樓臺。吟情喜此臨觀豁。十萬京城入眼来。

山城　木村昇齋

圓山

古と國の人々
ひのもをとひとり
月雪花と吉野の庭

山城　安藤吉春

圓山古寺點塵稀。不似營ニ丘路非。
林外暮鐘聲隱ニ。落花深處尤僧歸。

武藏　關根休蓂

花を眼の下に
見る　金風

南山を遠ひ
ここよ　同上

○圓山公園

圓山安養寺ハ山門の別院ふして傳教大師の開基の由往時ハ其境内ふ正阿彌左阿彌重阿彌一の寮也阿彌端阿彌連阿彌等の六坊あり坊ハ山腹ふ架して高樓を營めり洛下瞻望ふ美觀の秀名あり庭中の奇構木石の幽妙真ふ絶景ふして諸遊の設け具備せざる無く萬客來て此樓ふ登り此風景を愛せざるなかりしが物變り星移り正阿彌端の寮ハ今也阿彌之を買了し大ふる西洋館を新築し也阿彌より正阿彌の新築へ長廊を架し以て往来を自由ふし且つ其槁の中央より市中を一眸下ふ眺望せ其風景真ふ秀絶ふりと因て當時ハ也阿彌左阿彌の二坊とおり他の四坊ハ廢滅ふ属せりと聞けり

建久年中ふ慈鎮和尚住み其後時宗と改め國阿上人住職せりと聞く本尊ハ阿彌陀如来の由都名所圖會にいふ吉水の井ハ鎮守辨財天の傍ふして青蓮院宮御代々の法親王灌頂の時此水を閼伽とし夜深更ふ例式の列を紆し來臨し給ひ御手づから汲せらるゝといふとあり又近年此地ふ人造の温泉場を構へ傍ふ三層の高閣を營めり粉壁彩粧其精を窮め其美を盡せり閣ふ登て之を觀る時ハ洛下極目西南北の三面瓦屋稠密參差して恰も魚鱗の如く眺望の清觀言ふべからず中ふ就て宮殿高棟雲を突き翠樹茂林の間ふ隱顯し穆々深遠威有て猛らば神有て存し肅然敬意を生ずる者ハ舊皇居是なり樓櫓亭々天ふ冲り雉堞輝々日ふ映じ巍々堂々嚴として犯すべからざる者ハ舊二條城ふして當時の離宮是なり遠望清絶洗ふが如く眠るが如く笑ふが如く遠きが如く近きが如く春時櫻花爛熳の景況人をして懷想

已むべからざらしむる者ハ嵯峨の嵐山是あり其他の美觀枚舉ふ遑あらず謂ふべし洛下の眺望ハ最第一の秀場なりと

入造温泉吉水開。亭々三級聳樓臺。寺中游興尤存靜。都下瞻望獨占魁。靉靆霞紅嵐嶺上。玲瓏月白　鳳城隈。絶奇疑見圓山景。飜覆謫仙壺底來。　増山丹蓉

往来如織極繁昌。況又登覽濶四方。翠靄嵐山呈美色。青烟鴨水表嘉祥。花紅柳緑催吟意。月白風清伸雅腸。此地遊情人若問。應稱別界一仙鄉。　仝　上

才をあく心吉ふ寺の内みやこのちまを眺の下ゝて　仝　上　仙境ゝ吉ふハ爰あり花櫻　仝　上

角屋の照忘まて遊ふ人絶もかゝちも南山の主　仝　上　春雨や報寺て待つ宮軒　仝　上

殊ゝき遊ひ西ハ閑山の行るしも九き改ゝり　仝　上　春雨や二階ハ鼓下ハ琴　仝　上

高廊架出大樓中。疑見九霄萬丈虹。遊客逐涼消夏熱。冶郎占景醉春風。武陵挑與長生殿。劉阮天台不老宮。仙境田頭非遠地。無雙奇構是神工。　増山丹蓉

此是仙鄉獨占魁。嘯花吟月勝遊催。衛生隨意長生殿。養老自由不老臺。蕩漢冶郎乘醉去。文人騷客帶嗤來。高廊遥見京城裏。恰似画圖眸下開。　仝　上

もろゝの桃の涼いかてゝもうきせゝそゝ南山の望　増山丹蓉

涉ゝて名も吉ふのいやちこハ安くふ涼まて安せさりけり　仝　上

○新聞紙

嗚呼偉なる哉文明の美明治以前ハ街頭ふ勸化念佛鉦の聲坂東西國順禮の錢を求る鉦の音チン〳〵クワン〳〵ケン〳〵と喧しゝかりのみなるふ維新の御代の貴さハ詼事の醜ハ地を掃ひチリン〳〵の新誌賣東西南北奔走の金鈴の音勇〳〵く中外電報又ハ雷京都。京都近江新報等の新聞紙其賣子迄甲斐〳〵々ゝくも出立て因循の夢舊習の眠り覺さん風情ふてチリン　チンリン　チリンと響く遠音を待兼て論説公判雑報の科目多きも到底ハ蓼喰ふ蟲の好き不好き目を刮り頸を延べて待ち我も〳〵と買求む其販賣の迅速ハ風ふ木の葉の散る如〳〵是き文明の進歩なり

隱きをるより見ハきをる莫く微ゝなるより顯ハれをる莫〳〵故に君子其獨を慎むとハ中庸の語尚ハくハ屋漏ふ愧ざきとハ詩

新聞紙

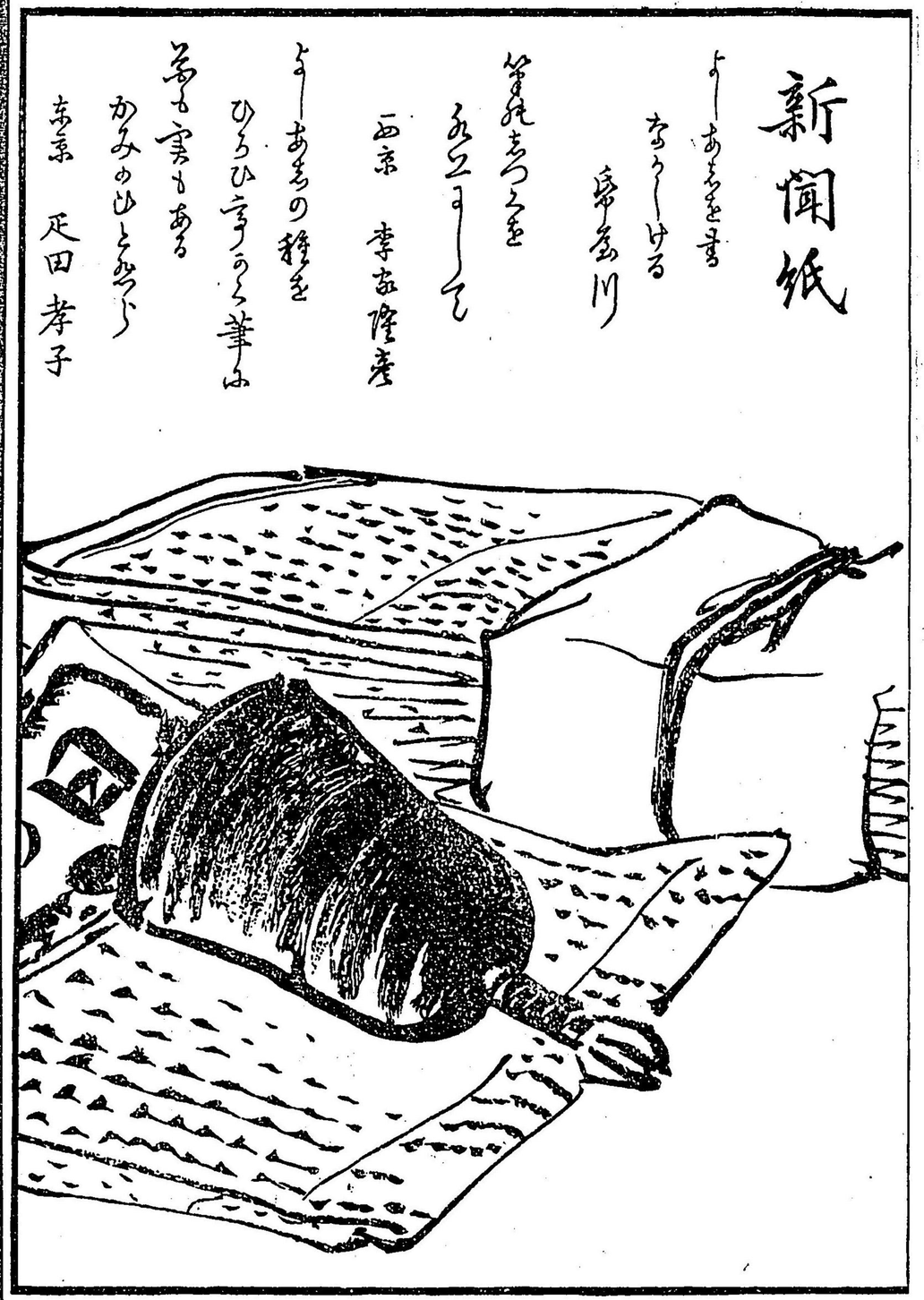
よゝあまを書
なるゝける
帝都川

筆花ちつを
ゑとすゝを

西京　李白隆產

よゝあまの稼を
ひろひ言ものゝ筆ゆ
筆も實もある
かみのゆとゝゝ

東京　疋田孝子



人生耳目政論宗。諧謔悃誠
須洗胸。餘白假題朝挂句。筆花
開處墨花濃。

武藏　関根休莽

喜純ことのよきる
あるきもちるゝて
皆此帝のいさを守りゆ

東京　富田ちる子

新ちるる事の
かきり城出張
あつめの勢てそ人ゆちら生

全上

炭つるや
片耳ちつを
心を交ゆ
遊ひけり

武州　著て

目後の孩　お後　唫風　日之

經の句何きも意馬の惡道へ飛出を手綱牽留て未萌ふ防ぐ教を
り楊震ゞ四知亦然り古語ふ所謂幽ふハ神之を罰し明ふハ人之
を正を其罪何ぞ蔽ふ可き天網恢々疎ふして漏さゞる金戒ある
も爰の事然り而して方今新聞紙の世ふ行ハるゝや小春秋とも
云ひつべき勸善懲惡偏頗なき至公至平の筆誅の原質有し親戚
の依怙を離きて褒貶の正義存る規矩摸範亂臣賊子慄然と膽
を破きるのみならば特ふ人智を開達し氣力を生じ卑屈を去り
民權を伸暢し國産を興隆し善を皷舞して惡を戒しめ綱常扶植
維持の功真に淺鮮あらざるふり然りと雖も小人ハ色と欲とに
迷ひ入り一寸先ハ未だ愚ゝ方寸内も真の闇闇から出たる向ふ
見ず投死情死縊死放火脱走密夫掏摸盗賊至らざるなき惡行を
直ふ掲げて世を懲を其報道ハ置郵の命ハ未だ愚ゝ電信程ふ迅
速ふり
新聞紙讀む功績ハ善惡邪正明かに三綱五常の道直く即今實事
の早學び目前悟道の知慧袋一點の私意カへざる裏面おき兩面
摺り勸善懲惡諸惡莫作社説凛々掲載の心ハ日新日々に世の風
教を維持せんと直き心の駒ふ乘り管城子の鑓提て文陣の中縱
横ふ爰を詮度と馳騁を記者の正勇賞を可し
抑ゝ新聞紙の盛衰ハ都下の盛衰ふ關係を方今府下新聞紙發賣
の多き真ふ前日に倍蓰せり然らば則府下の繁昌推て知るべく
文明の進歩亦察をべし密夫も其姦を蔽ふ事能ハば醉漢も其本
性を欺く事能ハば善惡邪正報告の疾きこと影響啻ならば未曾
有の盛事と云ふ可きなり

世のことを洩きず詳さにすまき載るいきをのまねき天のゆつの郵　姫山人

事ともあつめつゝ矢よりも早く世ふ伝ふなり　仝　上

まき載る事ハさやかき法あり善きも悪しきもやかて写して
よく〳〵筒此拘を要く一筋ハ誌るも書さる筆のいさを〳〵
田かみおくそ〳〵き筆れ力こそ石ふ五つ矣のたくひありれ
まくり〳〵きいさを

増山丹蓉　仝　之　仝　之

慕〳〵梅の花　丹蓉

勸懲擔得杞人憂。直筆董狐眞可
傳。欲報國家生曷惜。將矯世弊死
不休。正論常要百家鏡。高識何求
萬戸侯。賊子乱臣皆震慄。綱常扶
植小春秋。

新刊多式いさを　増山丹蓉

清〳〵小春秋　丹蓉

敬る事を秀ふ　増山丹蓉

清〳〵さや安ふ　仝　之

ゆるみまく〳〵梅の花　仝　之

悪の子孫絶

新紙登来世上評。正言讜議發心盲。跫音驀々郵丁響。鈴韻鏘々叫賣聲。甲是乙非談
反覆。官令民報筆縱横。一枝彤管千斤力。震壓姦夫淫婦情。　増山丹蓉
新聞配達速於郵。早已明朝上枕頭。淫婦姦夫惶似火。亂臣賊子忌如仇。董狐直筆避
三舍。汲黯讜言壓五侯。正義凛然毫不假。應稱當日小春秋。　仝　上
探隱穿微眞可驚。堂々論説筆縱横。萬民醒覺因循夢。世上挽回道德傾。毛羽不輕天
意重。泰山不重義身輕。誰知一葉新聞紙。勸善之心懲悪情。　仝　上

うそ偽りをけて笑くおとあひ是ふ事を面かくる事のひ〳〵ひ〳〵　増山丹蓉

○停車場

嗚呼偉なる哉文明の進歩海ふ瀛船の鋭あり陸ふ瀛車の捷あり
府下七條東洞院停車場の建築ハ美麗の壯觀突兀雲ふ冲り高大
膽を驚かも瀛車の迅速矢の如く飛鳥も避る遑ふく或ハ觸きて
落つといふ當時東京ふ全通し一晝夜ふ到着も東西両京比隣啻
ならば眞ふ一家の如きなり
瀛笛聲迸て出期を報し機關動く處車輪旋轉直ふ衆車を引く其
狀恰も黒龍の地を捲て走るが如し烟拔の筒ハ黒煙天を衝て暗
く蒸氣釜の湯煙ハ白雲地ふ漲て白し爆々熇々石炭其き紅ふ轔
々轟々車聲其き喧し瀛室先ふ在り御者之ふ乘る煁水之ふ續ぎ
衆車亦之ふ續ぐ其數七八より或ハ多きハ十五六ふ至るといふ
嗚呼往来の多き旅人の夥し千賓萬客朝暮絶えば公用の爲あ

停車場

煙もてゐる
車の笛は
ぶも

車を発ぬ
ぶ小ぶや

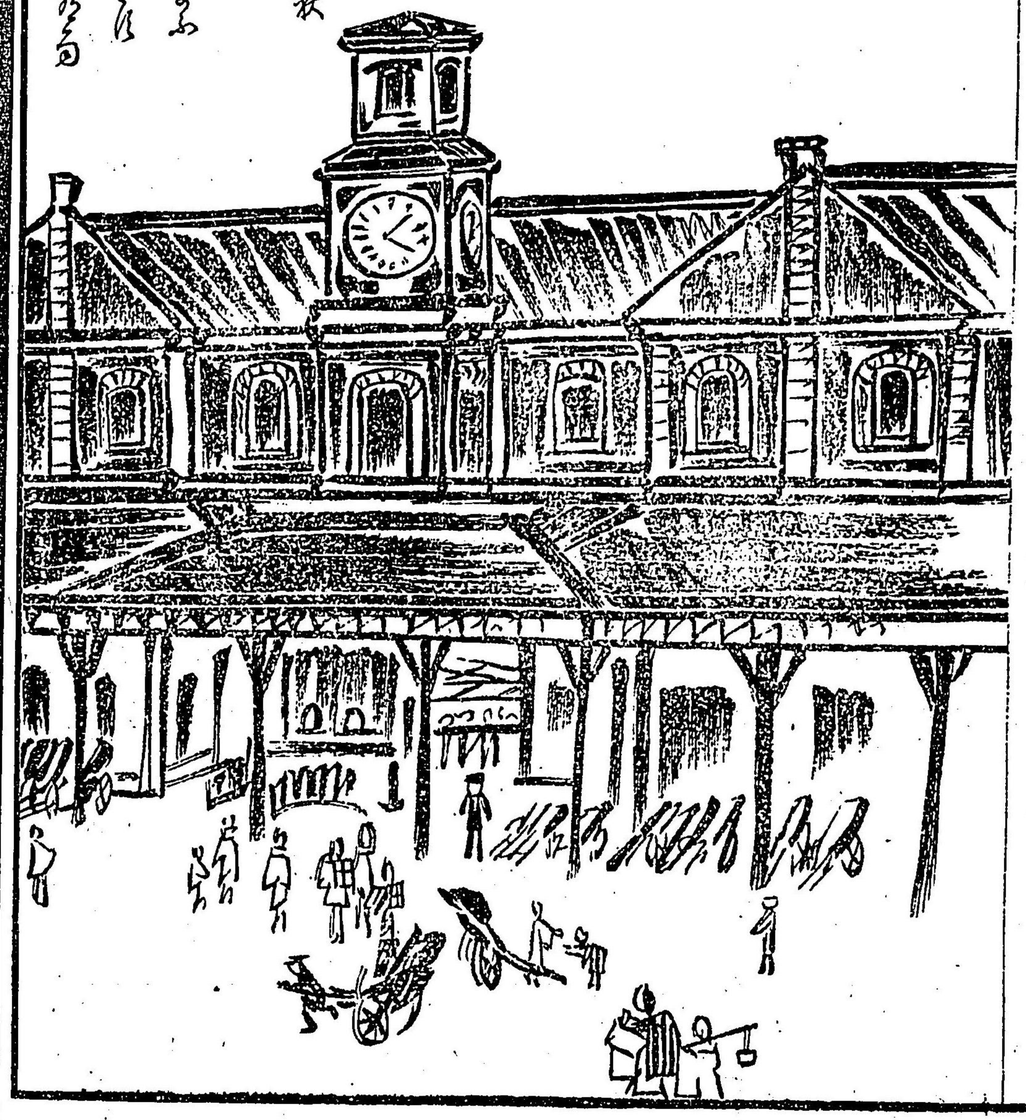
汽きふ小り

大和　京　奈秋

ぶ車や

西あの笛かふ
ふ小ぶきぶ

ぶ小　ぶ西



曉發　帝京乘黑烟。片
時看盡幾山川。飄然忽到
舊都裡。不羨揚州駕鶴仙。

武藏　關根休莽

噴煙車勢似
轟雷。絡繹街
頭送客來。京
洛風光宵好
在。瓦斯千點
幾燈瑰。

山城　田中南陝

鐵路貪行乘晚驅。遠山長水淡
將無。斜陽殘處好回首。一抹烟
霞是舊都

長門　村田看雨

樓臺鐵柵境清佳。東走
西馳時豈乖。車客紛々
檢知閑。繁榮渾在七條
街。

全　上

り私用の爲あり遊山翫水神社佛閣商賣事務ふ至る迄由らざるなく乘らざるなし其疾き矢の如く左右萬觀悉く其正形を認むる能ハぬ横斜延暢恰も縞地を見るが如し俗ふ縮地の法と稱せるハ是等の迅捷を云ふあらん

出發時ふ先だちて衆庶聚ること雲の如く停車場裏頓ふ喧々囂々たり須臾ふあて流笛一發烟を捲て進行せ場中頓ふ寂寥たり既ふあて次出の期ふ臨み衆庶の輙湊亦前の如く一集一散一喧一寂交互相續ぐ唯人顔の異あるのみ其變幻恰も死生の一小天地ふ似たりと謂ふ可きあり

因ふ載せ去る明治十年僕在京の時に當り恰も鐵道開業の式あるに際し幸ふ實地の景況を拜觀し奉る僕の慶幸何を以て之に加る有んや畏れ多くも天皇陛下の聖容を拜し奉り覺えず感涙襟に滿つ抑く天顔を拜せるの難きや明治以前にハ雲上人に非ずして地下の者にハ仮令一軍の將たり共容易く拜せるを得ず況や卑賤に於てをや當時ハ則文明開化門閥廢止の世とおりて和光同塵九重の内雲開け御通輦の際ふ卑賤の者も遥ふ天顔を拜し得る事ハ所謂盲龜の浮木優曇華の花の歡び啻ならぬ手の之を舞ひ足の之を蹈むをも知らぬ謹て當日の景況を記し奉りたる愚文を爰に記載して後世迄も此編を繙き給ふ看客に當日未曾有の盛式を告ぐと云ふ

鐵道開業式拜觀之記

維時明治十年二月五日京南停車場に於て京攝間鐵道開業式を行はる時なる哉　天皇陛下幸に行在し給ひ親しく臨御ふ

し給ふ場の建築突兀雲に聳えて層峯疊巒の如く宏壯華麗目を驚かゞに堪たり煉瓦石ハ巍々として夫れ高く積み粉壁ハ皓々として夫れ白く塗きり日章の國旗ハ清く風に飄へり赤白兩段の旗章ハ鮮に日ふ閃き高柱ふ彩布を巻き常磐樹の枝葉草花を纏ひ場の正面中央に　玉座を設け上下左右に金襴錦繡の美麗を以て装飾し場の東庭に兵士一聯隊嚴然整列威風凛々たり場の北面に尻上りの桟棚を構へ諸官員並ふ諸區長及び衆庶の拜觀場を設く同日　聖輿晨に宮闕を發し瀛車にて大坂兵庫へ臨幸あり該地の開業を終へ給ひ同日午後四時發の瀛車にて更に京南停車場に着御遊ばされ直に炯爛たる金飾の大禮服にて設けの玉座に登り給ふ其他諸貴官同く大禮服にて在右に列立し給ふ此時鐵道開業式の　勅語並に京都府知事槙村正直君の祝辭等あり而して諸官員並に外國公使等拜し終て式了り目出度還幸遊ばさる其盛装儀容真に筆墨の能く盡す處に非ず當日府下市中悉く國旗を掲げ幕を張り燈を點ず或ハ齊しく紅燈を掲るの區あり或ハ花門を建るの町あり或ハ燈上ふ綵花を装置し軒頭庇下に挿ゝあり又一層の美觀と云ふ可し加之區々町々より引物或ハ作り物と唱ふる者を出し競ひて其精を盡し爭ひて其妙を極む其製作真に區々町々にして一ちらぶ大孔雀あり或ハ兒島高德櫻樹を削り丹心を吐露して文字を書する處の製あり或ハ牡丹ふ獅子の作あり各自綺羅錦繡を以て之を裁ゝ其狀真に活るが如し其他枚舉に暇あらぶ或ハ花傘の下美彩の旗を飄へして過る有り或ハ紫幟を連れて行くあり千紫萬紅目を驚かし膽

を消せ拜觀諸人老若男女貴賤貧富の差別無く都鄙遠近の區分なく雲來蝟集人山人海壓撲摩軋雜遝道路に填咽し錐を立るの地無きに至る嗚呼蠢爾たる僕幸に此の明治の聖代に遭ひ加之畏れ多くも天皇陛下親臨の開業式を拜觀し奉る何の大幸福か之に如んや何の大吉慶か之に過んや謹て之を祝し又謹て之を記せざんバ有るべからず抑天下の父母たる者ハ天下を富さざんむ有る可らず天下を富さんと欲せむ天下の大利を興さざんむある可らず其天下の大利ハ於る其國産の運輸を便利し諸物の送致を迅捷にするに在り中に就て瀛舩海ハ躍り瀛車陸に馳せ是れ富國の要具と云ふ可し而して我國瀛舩略備ハ きり唯瀛車の設未だ備ハらず 天皇陛下夙に聖慮を爰に回らし給ひ巨萬の金を抛て萬民不朽の便利鴻益を謀り給ふ是より京攝比隣の如く轉瞬の中吉凶通し覆手の間得失告ぐ呼應の迅速真に影響の如し此舉特に京攝人民の幸福なるのみならず合せて全國の幸福に非ざるして何ぞや是れ所謂天下の大利に非ざるして何ぞや天下億兆の父母に非ざるして何ぞや欽仰せざんむある可からず感歎せざんむ有る可らず因て此の盛式を記し謹て 天皇陛下の天德聖壽萬々歳を祝し奉る

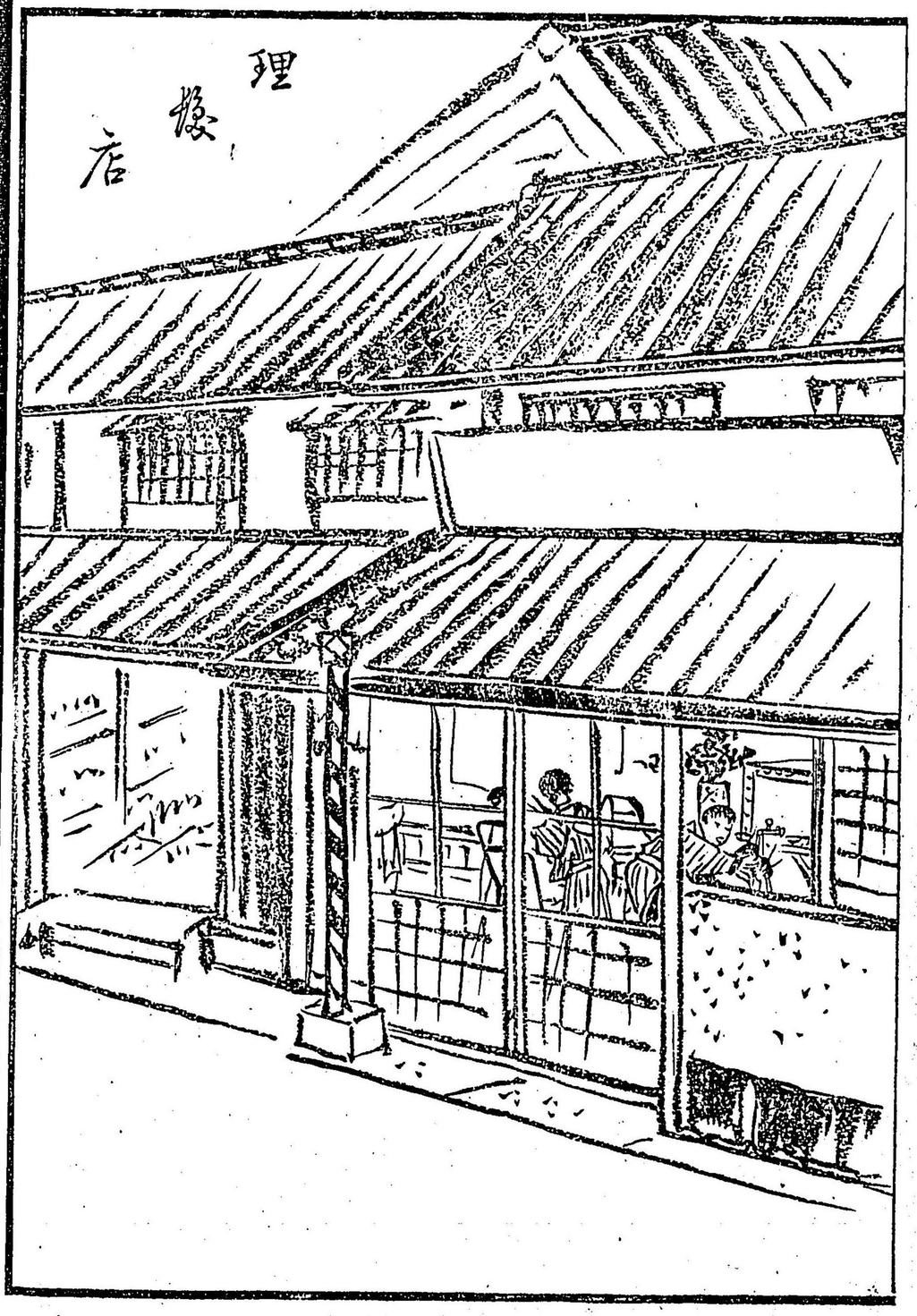
明治十年二月五日

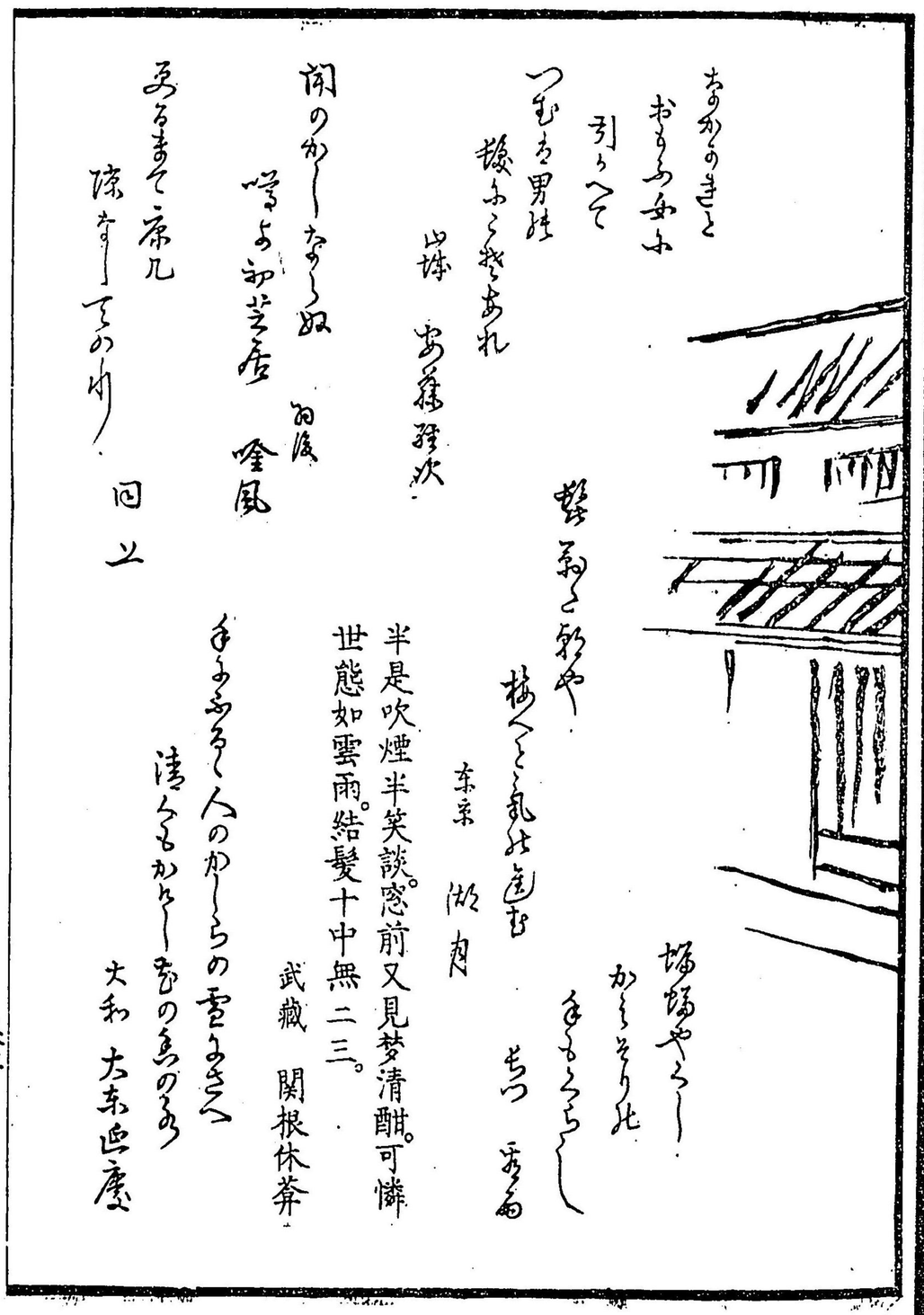
増山守正謹識

六十餘州皆比隣。瀛車輕捷恰如神。飛龍踴躍生雲氣。猛虎狂奔起暗塵。
千里半炊真縮地。萬山一響實雷輪。不須牛馬舟輿力。坐作朝秦暮越人。 増山冊蓉

火輪製作奪天工。鐵路縱横都鄙同。烟氣忽疑龍捲地。吼聲俄訝虎生風。
女男幼老言相接。吳越和洋意互通。五十三程容易過。兩京坐到一炊中。 仝 上

湯垣りの車のちかゝ抜ひあく矢よりもあき法返りの新 姫路城 基を幸や世の出来たりし 丹蓉
くふハ西あそハ東の都政元運ひと夢の拓拾の船 仝 立 幸なる法てる思ひ侍幸坊 仝 立





半是吹煙半笑談。窓前又見梦清酣。可憐
世態如雲雨。結髮十中無二三。

武藏　関根休斧

大和　大東亜慶

○理髪店

理髪招牌軒頭ふ標ゞ玻璃障子日ふ輝き燈ふ映ぞ玻璃燈ハ明々として晝の如く其き清く鋏の懸たるハ林の如く其き並ひ甲ふ諸藝の廣告あり乙ふ各社の新聞紙あり明々光々人の美醜を照して秋毫の私ふき者ハ姿見の鏡是あり蒸氣沸々空を突て上る者ハ黄銅鑵子の容を待て火ふ起る是なり湛然靜澄影を寫ぞ者ハ磁器ふ水を蓄ふなり三分刈五分雜器械艾孰れも辭ぞる所ふく專ら客の好む所ふ隨ふ髭鬚を剃るゞ爲ふ來る者あり頭髪を雜ぐゞ爲ふ來る者あり未だ因循脱せざる頭ふ鬢を頂きし田舍翁の來るあり油光の兀頭藥鑵めけるの隱居あり長頭木椎凸凹の形ハ種々ふ異ふれど心ハ同じ清淨を欲ぞるならん老若兒童踵を接で輻湊し或ハ搨ふ凭るもあり或ハ登り座を占て世上の事を喧評ぞ俳優の美醜米穀の相場生絲の高下茶價の頡頏此方の色事彼方の賊難身投情死縊死夜逃脱走犬の産猫の淫事ふ至る迄舉ざる無く言ハざる無し犬も喰ざる夫婦喧嘩滋養ふあらぬ夢の牡丹餅跡へ戻らぬ花嫁の放屁先へハ行ぬ紙袋の猫の評まで殘ぞなく置郵の命より速なり

剃師剃刀を研ふで髭鬚を剃る剃刀の輕きハ皮膚を這ふ如く耳中鼻穴ふ至る迄恰も痒を搔く如く剃刀を輪舞して之を剃る其妙真ふ言ふ可らゞ既ふあて石鹼水を塗擦し櫃水を滴下して頭髪を洗ひ又櫛し又蜜篦し又櫛し遂ふ香水を霧射して其成を告ぐ或ハ髪を雜ぐの客ある白巾を以て胸腹左右を蔽ひ雜髪の衣服ふ飛散を豫備し櫛と竹篦と鋏とを以て是き疎し是き雜ぎ是き櫛ぞ其捷言ふ可らゞ其精亦言ふ可からゞ雜中唯戛々の聲を

聞くのみ諺ふ云ふ餅ハ餅屋と各自其業ふ一ならぎんむ有る可らぶ

甲客あり乙客ふ語て曰僕ら隣家ふ夫婦の住むあり如何ふる宿世の惡縁ゝ喧嘩口論絶ゆるなく貪乏親父の棚卸あり三平二滿の惡口ありヒヨツトコ野郎と罵きバ惡魔婆の雜言ふ果ハ組打大騒ぎ研棒子躍り烟管飛ぶ地震雷鳴一時ふ起た如く困却と言ハ一座の年頭藥鑵の如き兀頭高慢の氣ハ天を突き蘇秦張儀が合縱連衡の全からざるを笑ひ孔明周瑜が其君をして天下ふ王たらしむる能ハざるを嘲る知ハ五大洲を籠罩し才ハ世界を丸呑といふ大天狗翁彼の光々たる兀頭を振り振一振して曰訣家夫妻の葛藤我き亦疾くより之を聞く其罪總て夫婿ふ歸せり經ふ曰く婦を教るハ初來子を教るハ嬰孩と抑ゝ一家の治らざるハ訣主不德の罪ふり訣主齊家の德あらバ閨門何ぞ治らざるの理あらんや是皆其本を務めざるに因るなり大凡そ物皆本源あり訣主其本源を詳ふせば已きが行ひふ猛省せば徒らに末派の妻女ふ罪を歸き譬へハ烟を厭ふて烟を扇ぎ醉を恐きて面を冷し蠅を忌で之を逐ふが如し何ぞ其本ふ歸らざる影の曲きるを惡まで形の直からんふ如ぎ響きを嫌ハゞ其物ふ觸きざるふ如ぎ徒ふ其末派を責て其本源を顧ざる時ハ已きふ在て後ふ人を求め已きふ無くして後人を非るの古言ふ反對し勢ひ何ぞ行ハきんや到底已ゞ本源を務むるにあり我身瓜して人の痛さを知るの理を知らバ其罪自ら歸きる所あり烟を忌で火を消せよ醉を恐きバ酒を絶て蠅を厭ハゞ器皿去き本源無くハ末派無し南風を求めんと欲せで須く北窓を開くべし總て道理ハ一以て之を

貫き曾参の唯も顔回の違はぬも訶葉の破顔微笑せる皆其本を知る故ぞ孔子所謂訴無らしめんとは是き本源を説くの言其禍を未然ふ察し其亂るゝを未萌ふ防く之を至當の處置と云ふ衆客退屈聞くふ倦み大欠して將ふ頷の機關を脱さんとする者あり睡て榻より倒きんとする者あり談翁は彼の兀頭を一振し鼻動うして烟吹き驕慢の氣は揚々たり

談翁猶も氣ふ乘じ他の厭倦を顧みぞ例の兀頭を振回し傲然として説て曰此店ふ聚る江湖の子心ふ留て能く聞きよ夫き光陰は矢の如く電光石火の迅速を知て研窮せらるべし寒來暑往四時循環真ふ瞬息啻ならば人の命も限あり人間僅ふ五十年寢る夜を引て廿五年況や老少不常まて四百四病の入れ嚢古墳多くは是少年の人と古人の句あるをや況や小兒の脆弱をや諺ふ井戸端の茶碗又は風前の燈火ふ比し或は草頭の露ふ譬ふ人間七十古來稀なる古詩もあり八九十より百年の壽命は一層の幸福ふして武内宿禰の三百ふ過ぎしは無類別格奇々珍々の長壽ふて他ふは例推ふし難し夫き人間のはかなきは昨日見し人はと問へば今日はなし翌日又我は誰ふ問きん寢る間のみ夢ぞと覺て知りぬきどさむるも同じ夢の世の中とある古歌の如くふある者を長老不死と油斷して誤違へ居る人は優遊放逸奢侈懶惰徒食のみして日を送り實地の勉強所かは月に嘯き花ふ吟ぜる風流きへ二段ふ預け後陣へ回し酒をくは何の巳ゞ櫻かな花より團子と喰ふ腹は布袋の如く飲む酒は長鯨の百川を吸ふ如く梅の花詩語碎金の上ふも散らぬ無風流加之語を解せる花ふ恍惚心醉し家産殘らず顛覆の基礎を營む遊蕩冶郎世ふ亦無しと

をべからぶ斯くの如きの人ふ限り勉強心ハ絶て無し此の文明の世の中ふ醉生夢死ハ遺憾なり冀くハ遊蕩の惰念を猛省一掃し油斷の大敵粉微塵ふ碎きて世界を睥睨し天上天下唯我獨尊天地ふ先だつて生せば天地ふ後れて死ふもせぬ無上靈寶親よりも傳へば子よも讓らぎぬ自主の明々心月を自由權利の峯頭ふ輝かもこそ文明世界の人あるに之ふ反もる懶惰生花柳の巷ふ身を投じ挑李の美娼細腰の佳妓ふ心を奪ハきて人の意見も忠告も諫めも耳にたこの栓もでたこうしの赤啞のうしの文字ふ釣上らぎ心ハ空ふ有頂天打込まばハ鉈鎌を上たゆハひふ身の瘡をついて行まれ竹槍での表裏も知らぬ已惚冶郎人の意見ハ彈指程も聞入きぬ馬の耳ふ風といふ奴ふハ真ふ困り切る各方も文明に恥ぬ勉強せらきよと天下の心配引受し相場二割と下ぬ顔又兀頭を一振も店客彌聞くふ倦み問ハば語りに退屈し辭を返も者ハなし訣翁手持無沙汰ふて頭の手入き濟み居しを是き幸といふ氣ふて烟管收めて歸り去る衆失笑し親方ハ跡見送りて獨言イツモ長居の彼の老の長談義ふハ困りきる

髮短髭長到處同。鋏聲戛々一房中。昭靈明鏡懸高壁。馥郁香油灌唧筒。梳櫛梳來鬆鬢理。剃刀剃去鼻毛空。時逢魋結君休笑。此是維新前世風。　増山丹蓉

風俗泰西同一流。長鬚短髮各邦周。衛生心上消三毒。清潔胸中掃百愁。懸鏡明々人寫面招牌閃々衆凝眸。鋏聲戛々朝宵響。薙出千賓萬客頭。　仝　上

薙こゝる鉄の名もいきとくことゐ拔の世ゆきかえつ　昭山古山　くーけつる風ふ偖おき拔の影　丹蓉

鉄ふ口ふ入ふ来る人をまゝ口ふあゝと薙こゝる髮　仝　上　冷風ふ狗の夢ふ拂ひ　仝　上

耳の穴ふ鼻の毛ふ迄も孫のごとく鋏ふ利刀の心地よき哉　仝　上　理髮こゝる心涼しき思ふ哉　仝　上

薙こゝる髮の毛先と語ゆよ心の夢も消え失ゆり　仝　上　髮薙こゝるとゆゆ涼しき我心　仝　上

斜條紅白捧牌中。千客萬來理鬢蓬。梳櫛輕磨振鬼術。剃刀輪舞奪天工。佛英目下皆齊一。和漢從來悉異同。魋結之人君勿笑。維新前日本邦風。　増山丹蓉

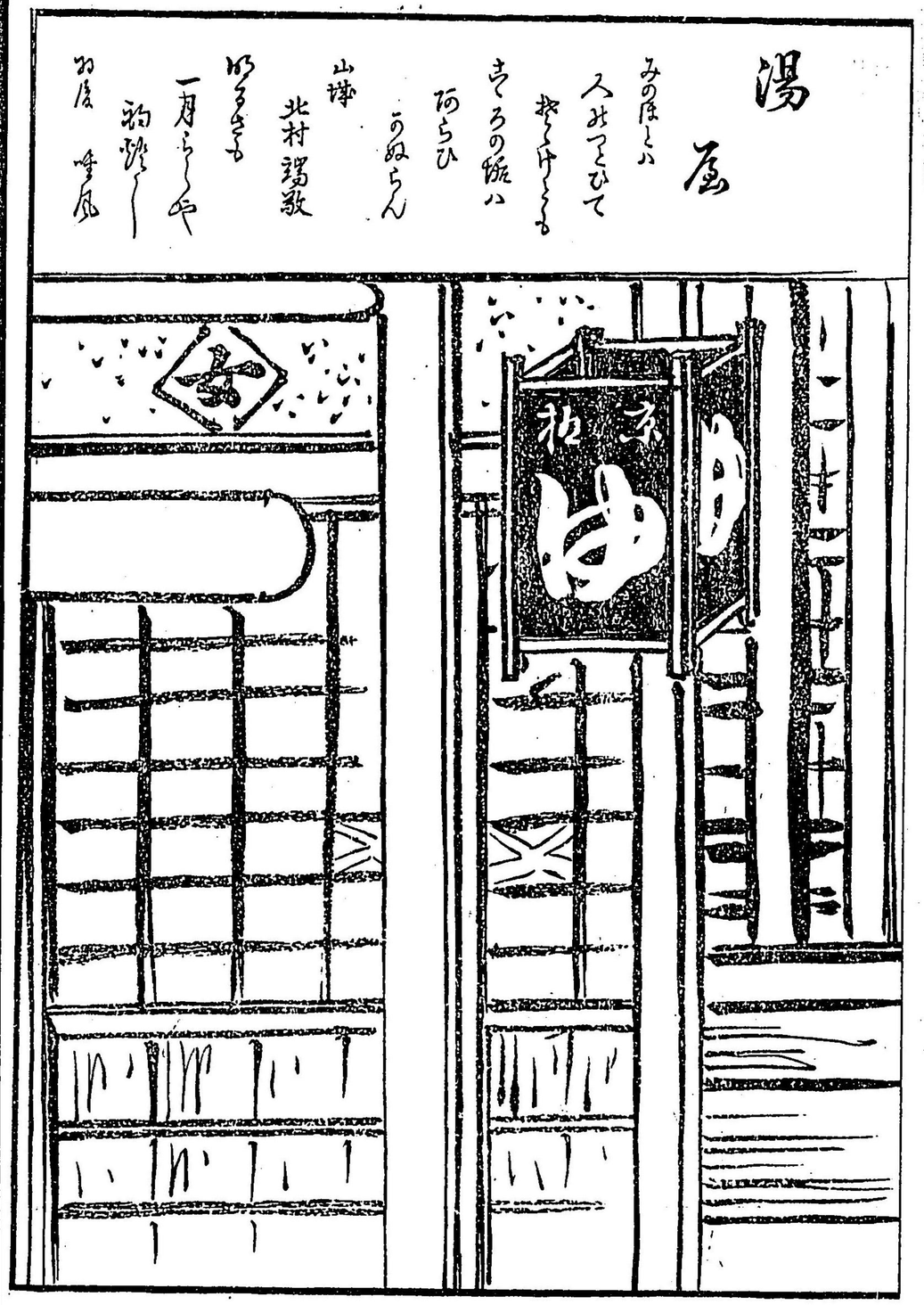
薙こゝる毛先の塵と語ゆ心の垢も散る思ふの邨　昭山古山

湯屋

みのほしゝハ
入ぬとひて
ぬくけれ
きてろの袋ハ
ゆらひ
ゆぬらん

山城　北村湯敬

ゆるきも
一月らしゝや
初湯
湯屋　峰風



風呂の湯を
ぬ〜ゝ
帰恒別

仝　之

温液盈＝出浴
遲。玉為顔面雪為
肌。垢汗一洗京華水。
幾許嬌姿窈窕姿。

山城　渚　方舟

ぬきもいや〜きも
みゐまこうゆり
もつ　雪之丞

ゆあ〜て
のはするゆあ〜の邪

仝　之

ゆあ〜て浮世のあを洗ひるゐを常のひとものあ

東京　矢掛子雄

ゆあ〜ひれく〜あ

ゆのよゝ土地ふ涼〜や宮の風

東京　湖月

ゆ〜ひて宝も八重あれ梅叮旬ひ袋もちはる女房

東京　宮川輝久

湯屋

混堂ハ各所に多しと雖も新京極櫻湯を以て繁昌の第一とす其他到る處男女の別を正くし區別を立てし混堂の兩場區劃の中央に高座を構へハ方ふ眼を配り諸衣服や諸物の遺失豫備をなす入來る男女門外ふて訣戸々々へ中分し我も〳〵と浴みせり温〳〵蒸々室内ハ霞みて春の如くなり

男堂混雜沸く如し垢を摩る者あり愉快を叫ぶ者あり淨留理を語る者あり長歌を謠ふ者あり念佛又ハ題目を唱ふる者あり熱を叫で板壁を敲く者あり種々の景況一ならぬ甲あり乙ふ語て曰く君見ずや彼の湯の盤の銘に曰苟に一日新あらば日々ふ新ふ又日々ふ新ありとハ千歳の古昔ふ於て猶然り況や方今駸々乎文明日新月盛の時ふ當て乳臭の兒童も學ふ「アイウエオ」我等ハ愚蒙の頭腦もへ魔鬼の工場地となつて常ふ恥辱ふ「アイウエオ」汗牛充棟五車の書ハ有きども我ハ開き盲漢字ハ釘の行列ゝ洋字ハ蟹の横這ひに見えてチンプンカン左衛門文とハ放屁の音あるか字とハ肛門病あるかと解し誤る事多く唯身を洗ふでかりにて心の曇り研らずハ文明の世の民たらぬ遺憾ハ限あしと云ふ乙の老人之を聞き御説ハ至極御尤文字の讀めぬ哀しさハ同じ文字でも讀やうで反對の義となりまする布袋と布袋散髪と散し髪華瓶と華瓶佛學と佛學あど大ふ相違がある事ふあると孫ふ嘶を聞きまし た此文明ふ光られぬならぬ心ハ真の闇一寸先の闇よりも寸心内の闇の夜ふ光るハ藥鑵の兀頭イヤハヤ殘念千萬と嗟歎をもれで一氣力ある少年が聞取て隱居必ず歎くまゝ漢の馬援ハ窮してハ當ふ益ゝ堅かるべく老てハ當ふ

益〻壯んなるべしと言ハきたる矍鑠翁の勇志を體し一精神を研くべし武内宿禰ハ三百餘歳迄も政事を輔佐し太公望ハ白髪にして軍師を勤む是皆精神老ぬ證到底志氣を振起して研窮あらバ眼も見えて必ず進歩有りまゝやう心誠も求れゞ何ぞ成ざる事あらん歎くハ愚痴の至りぞと意見せらきて老人ハ負を子ふ教ちき淺瀬を渡る心地せり

女湯も波を飜せ温湯水滑ふして凝脂を洗ふ白き肌ハ雪の如く玉の如く貴妃を欺く美人あり三平二満の醜顔あり臀尻の大なるハ孕胎の自然を表し乳の大あるハ生育の誠を顯ハし石鹼を持つあり糠袋を提るあり子を抱くあり嫁の不孝を詈る姑あり姑の無理を咤く婦人あり夫婦の喧嘩密夫の風説下婢の妊娠擅那の撮み喰迄も舉ざる無く告ざる無く置郵の命より速あり其他雑遝一ならぬ熱を訴へて幼兒の泣くあり蹶き倒て笑ハるあり肩ハ肩と接し尻ハ尻と撲つ湯中出没波浪を起せ是ぞ混堂の繁昌海と知られたり

湯の揆心の塵を洗ふんと
日〻新に湯屋を振ふ
　　塵の中山

おのつから心の月ハさやらあり
雲ゝと思ふ塵を掃へ　　仝　之

湯の恒寒の雲あとたゝ川て
雲めきし女湯の春　　仝　之

湯を洗ひ心ほゝむと法人の
日〻ふたゝにふきはひより　　仝　之

揆心や雲あ掃ふく湯屋の内
塵しきや拘ハ本末を一物　　丹蓉　仝　之

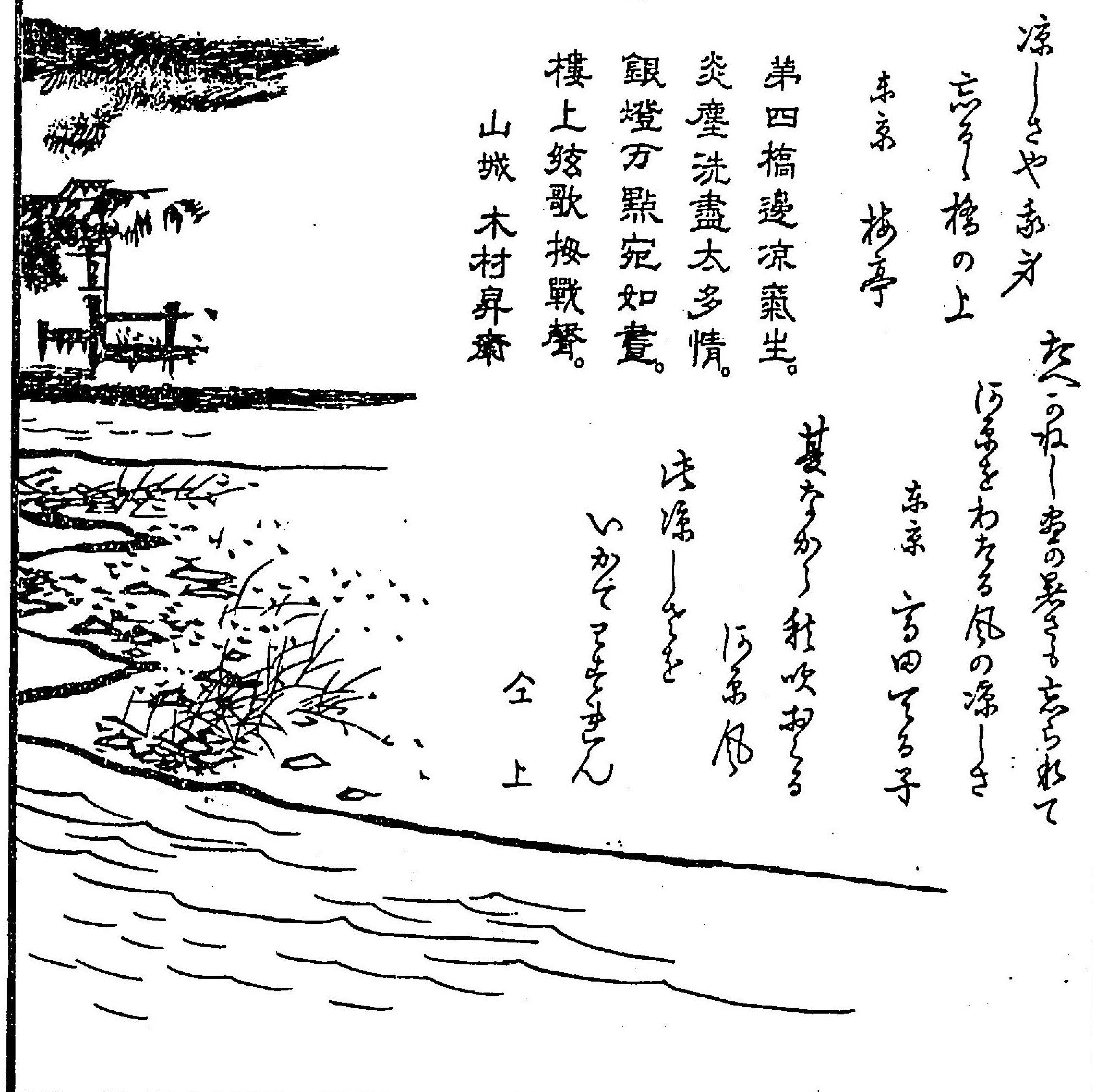
温々浴室暖於春。場裏太清無點塵。燈影明々防惡賊。
析聲戞々報嘉賓。尊卑男女爭宵夕。貧富童翁競曉晨。
洗去全軀肌表垢。尚期察々一心新。　　増山丹蓉
日新日新又日新。温々浴室恰如春。女男有別正風俗。
貴賤無分尊睦親。度外養生神氣爽。非常愉快鬱情伸。
世間不止磨汚垢。要洗心中汶々塵。　　仝　上
無男無女容縱横。汚垢磨来身體清。念佛放歌皆自在。
吟詩題目悉隨呈。滿堂蒸氣晝猶暗。照室燈光夜又明。
沐浴快愉人若問。青天白日浩然情。　　仝　上

四條磧納涼

飛とのみ此風も
よるもよかよひきて
このわたりつゞふ
夕まぐれみる舟
大和 芝葛順

みなるゝ岸まれて
夏る納涼舟
西京 稲雄

涼しさの果ことを
あらきも加茂川の
水よやとれる
夜の影は月
東京 疋田芳子



涼しさや糸才
忘るゝ橋の上
東京 梅亭

第四橋邊涼氣生。
炎塵洗盡太多情。
銀燈万點宛如晝。
樓上絃歌挨戰聲。
山城 木村昇齋

たべのねし暑の暑さを忘られて
河原をわたる風の涼しさ
東京 高田てる子

萩すゝき秋吹おくる
河原風
夜涼しさを
いかでまさまん
仝上

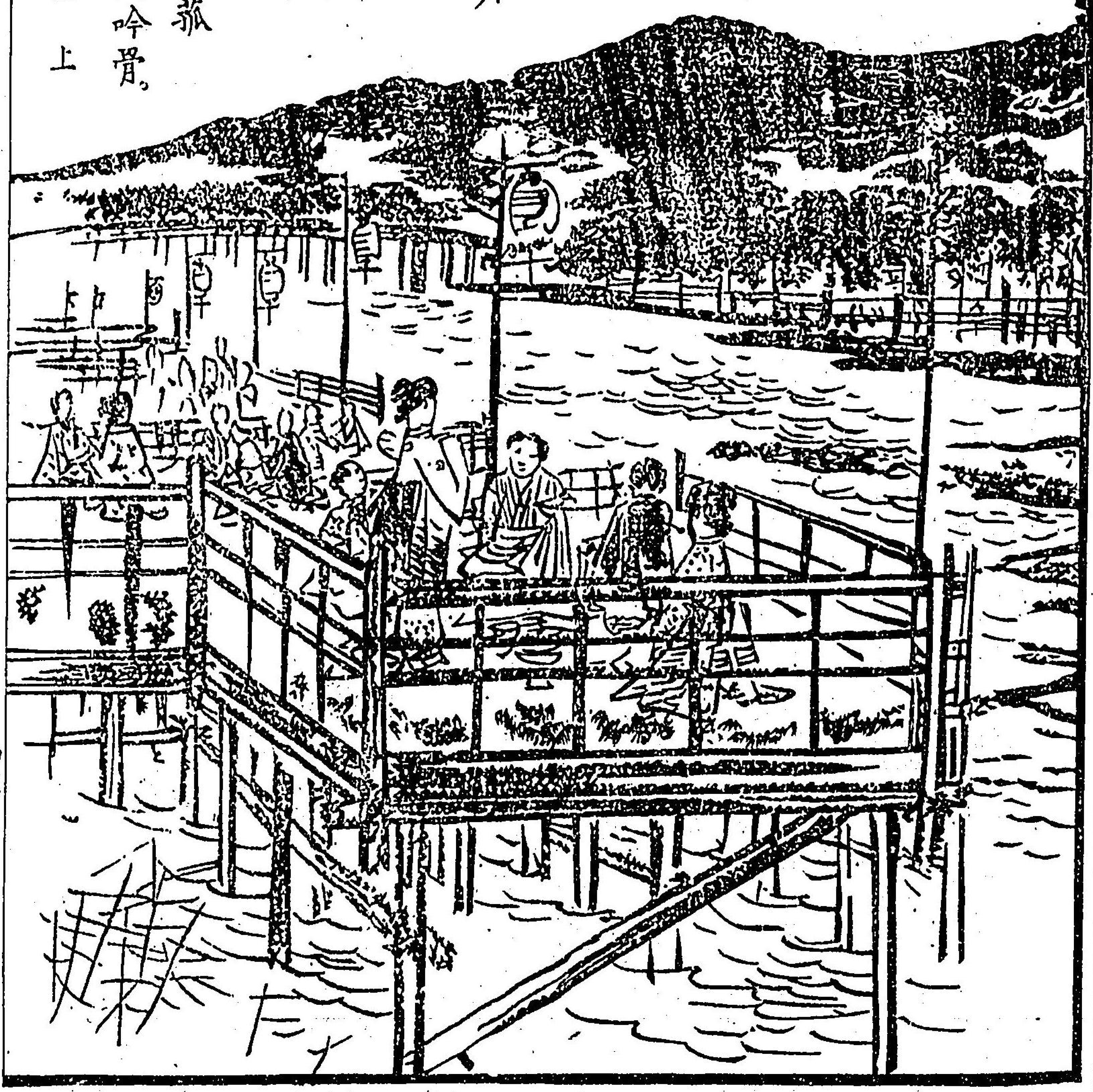
納涼む燈のかげに
なりぬる四条橋
羽後 金丸

すゞの川そよぐ
河原納涼かな
同上

砂磧濺沄水作紋。
三々五々捲輕裙。宵
遊却被涼風妬。吹盡襄
王夢裡雲。
武藏 関根休斧

四條河畔水泱々。人弄
清蟾恰似狂。東設舞筵
西酒席。綠楊濃處逐風
涼
仝上

知是清光照故園。頻風旅
月對殘樽。任他露氣侵吟骨。
卧揭通宵弄水痕。
仝上



○四條河原納涼

四條河原納涼是き亦高名の美觀都下觀中の花たり橋ハ鐵橋萬代不易河ハ名に負ふ鴨河の水淺流潺湲影を浮ぶるの上河中一面涼床を設け筵を敷て來客を待つ滿河の景況河ハ地席の如く河ゞ床几ゞ床几ゞ河ゞ水ゞ燈火ゞ燈火ゞ水ゞ人ゞ磧ゞ磧ゞ人ゞ其賑ハ言ふ迄ゝらば來客蝟集着服隨意羽織あり袴あり浴衣あり扇を閃せあり團扇を使ふあり和光同塵上下一致四海兄弟老たるを助け幼きを負ひ佳人を伴ひ丁稚を率る我も〳〵と搦ふ就き各自炎熱を驅り清涼を領して心氣を爽ふし精神を快くせ詩を吟ぜるあり歌を謠ふあり優遊自適心を無何有の鄉ふ歸し精神を安樂世界ふ馳せ轟々轔々の音ハ人力車の鐵橋を走るなり爛〳〵燦々の光ハ萬燭の河面ふ漲るなり爰ふ西瓜店の火より赤き行燈あり彼きふ心太の水より冷きあり甲ふヒヤコイ〳〵の白玉あり乙ふ甘い〳〵の甘酒あり各床拍手沸く如く或ハ飯酒を命じ或ハ水茶を呼ぶ婢女奔走左應右諾言下各種を送り來る真ふ影響の如し西岸樓上樓下銀燭晝の如く豪客來て財を散ぜ若し夫れ東山月を吐く時ハ音ふ名高き嵐雪翁の句蒲團着て寢たる姿や東山多代女の句明月ふ寢姿見たり東山成祇翁の句寢るに志を夜とハ思へば月の澄む梅通翁の句月の出や幼く並ぶ峯の松實に別境の遊びふて古人所謂清風明月寶價無き奇觀を名れ負ふ鴨河の磧より見る東山三十六峯寸眸ふ聚めて自在の樂みハ是ぞ觀望最秀の第一等を腹皷打て眺める御代の恩仰て感歎せざらん哉

石ゐかき清きゐの系の粧涼ゐ彦と月を賠せ路り　増山古西

燈〜竺を星かとそそる鴨川の清きほまきゐ新を写して　仝　上

ろかねの橋のほとりの廣涼ハ都の花の礎ゐ〜て　仝　上

燈〜竺の数阪ゐき廣納涼ゐ花かとそそるかも川のゑ　仝　上

人波捲起四條瀬。老若女男来往頻。磧地繽紛轟拍手。橋頭轣轆響車輪。管絃似海消炎熱。燈燭如花輝比隣。涼味千金難代得。江風吹盡滿胸塵。　増山丹蓉

此地繁華推四條。納涼人逐夏時宵。一川流水隔雙岸。萬點燈花照九宵。絲竹管絃生酒席。吹彈歌舞弄垂髫。街頭填咽如無道。車馬轟々走鐵橋。　仝　上

炎日西沈緑鴨洲。鐵橋々畔納涼游。吹彈歌舞幽情樂。絲竹管絃興味悠。萬斛清風俄失夏。滿懷爽氣忽生秋。燈華點々浮河上。光影欲流終不流。　仝　上

澄流鴨水帝都城。十萬逐涼同一情。絲竹管絃音上下。吹彈歌舞興縱横。芬々芳酒心身爽。陣々河風氣味清。萬點燈光江上滿。是人是磧不分明。　仝　上

炎熱如燬天日光。鑠金銷石人將狂。輙鮒待救行潦裡。池魚求生火災場。始知天道不殺人。鴨河澄水貫京坊。火毒保護四條磧。殘喘保得無盡藏。老若男女貪又富。晩来蝟集醫枯腸。燈火如花風如水。想見成佛生天堂。酒池肉林驚人目。珍差呉膾又蜀薑。詩歌謡曲皆隨意。摟々絃聲逸興長。別有乾坤無限快。東山吐月倍清涼。　仝　上

嵐山

東台又ハ吉野等の名勝ゐ頡頏〜櫻花を以て其名を世上ゐ擅ゐる者ハ京西嵯峨の嵐山是ゐり麓ハ保津川の流ゐ瀬も其川上ハ三里許兩岸狹隘其水急流激湍矢の如く舟筏飛ぶ如〜然り而〜て川幅此麓ゐ至て漸く廣く水流隨て緩〜花時恰も好〜舟を山水映射の間ゐ浮ぶるゐ梅通翁句あり行く水も行む花の盛りか形其清觀言ふ可らず一山櫻花爛熳雲の如く雪の如く笑ふが如く語るが如く韶光融蕩人を〜て癲狂せ〜めんと欲も遊人輻湊織る如く錐を立るの地も有らず酒店懸茶屋咽で將ゐ破きんうと恐き渡月橋梁撓で將ゐ折きんうと危ぶむ遊客狀態一あら花を見るが爲ゐ來る風流の客あり花を見せるが爲ゐ到る紅粉の娘あり酒を飲む遊客あり酒ゐ呑る〜醉漢あり詩を作る韻

嵐山

紅葉滿山秋色深。小
舟乘興與君尋。不知
人去樽還盡。渡月橋
邊日欲沉。山城　西川義延

常盤木の嵐を
除けて花咲
　西京　稲雄

花ちるや嵐山　おもかげ
　　山城　月上

花ちるや嵐山　東京　延田茂子

後世ふたたびみたき櫻哉　山城　界高

望好嵐山面々風。舊京春事入詩筒。晴川
十里溶々水。人歩櫻雲万疊中。武藏
関根休莽

穿入春風馥郁叢。貪看偏怕失西東。淡紅世
界香天地。微醉人迷嵐峽中。　仝　上

櫻花一朶五洲珍。豈倣薔薇
開小唇。請見嵐山春盛處。神
州神品表斯民。　仝　上

艶雪嬌雲語既陳。慙無詩賦
賽花神。推敲不若清談好。只
賞醤京浮玉春。　仝　上

芳春却是幽憂繞。半雨半風
晴日少。欲得嵐山構小亭。落
花深處聞啼鳥。　仝　上

みちゝの花ふかゝ花ちる
　　山城　南岳

見返れば花ちるあふぎ櫂の上　仝　德平

望見嵐山面々風。舊京春事入詩筒。晴川
十里溶々水。人歩櫻雲万疊中。武藏
関根休莽

穿入春風馥郁叢。貪看偏怕失西東。淡紅世
界香天地。微醉人迷嵐峽中。　仝　上

櫻花一朶五洲珍。豈倣薔薇
開小唇。請見嵐山春盛處。神
州神品表斯民。　仝　上

艶雪嬌雲語既陳。慙無詩賦
賽花神。推敲不若清談好。只
賞醤京浮玉春。　仝　上

芳春却是幽憂繞。半雨半風
晴日少。欲得嵐山構小亭。落
花深處聞啼鳥。　仝　上

河上三亭春色宜。櫻花爛熳逞芳姿。
就中我愛多幽趣。更好黄昏月出時。
山城　木村昇齋

士あり詩に作らるゝ暴人あり魚を釣る人あり魚を釣らるゝ人あり拳を打つ人あり拳を打るゝ人あり車を曳く人あり車を引るゝ人あり花より團子の人あり團子より大飯の人あり世い様々の好き不好き酒を呼ぶあり肉を命ぜるあり鮮鱗を料理せしむるあり心を安樂境地に養ひ身を極樂世界に遊ぶと雖も歡樂窮りて哀情生ずる理由にて夕陽西に傾き入相の鐘を撞出せ天龍寺其他遠近方々の寺より響く鐘聲に名殘盡ねど是非無くも心を跡に後髪曳るゝ樣に人去るハ是毎年の景況なり

増山守正

遊嵐峽記

明治十年四月念二日。余拉妻兒遊於嵐峽。此日雲晴風温。一望田野。菜黄麥翠交錯如繡。遠峯近巒翠色可掬。韶光融々和氣可人。其爽快不可言。妻携稚女之手。兄促小弟之緩歩。而余爲之殿。相聯而行。遂到距京城一里許。嵐山櫻花清麗。山水映射。麓有一川焉。是龜岡保津川之下流。而屬桂川之上流。水清湍急。舟筏上下。殊便於薪炭之漕運。有橋曰吐月。過橋沿流。遊客釣香魚。翻閃上竿。亦一奇觀也。而余有事。來遊後於花期。花既謝其八分。梢頭纔留其二分。殆似殘雪綴樹頭。無復爛熳紅雲掩山擁峰之盛觀。於是乎遺憾不已。已而有深感焉。嗚呼是猶人學問晩期乎。今夫年少志學。則其習與智長。化與心成。當得才智秀麗。文德燦然。優入藝林。飽咀英華。然而一晩期乎。則頭童齒豁。終朽枯如余而止矣耳。是何異夫觀花失期。徒悔恨不已者哉。因記以警世之少年未學者云。

思ひのほかの嵐山　詠山吉　あはれ彩雲の橋の嵐山　芳村杉を寿そ通へる　仝　之

知否嵯峨山嶺嬌。温容如笑現清標。櫻花爛熳水晶樹。梅蕚嬋娟白玉條。地設風光詩不就。天然奇景筆難描。眺望借問何邉美。春色千金吐月橋。

増山丹蓉

靄々温容堪遠望。清川遶麓美風光。羈臣遷客潛高跡。韻士文人吐繡腸。梅萼幽清銀世界。櫻花爛熳白雲鄉。千秋聳峙誇名勝。獨對東山永頡頏。　仝　上

節近清明日脚長。櫻花爛熳十分香。西施艶色避三舍。楊氏麗顔呈十莊。皓雪纜紛銀世界。白雲堆積水晶鄉。山川映射尤清絶。滾々成詩無盡藏。　仝　上

まくらぬ世ふと我ありけき　　哲山古丙

月ふせ花ふ嵐の山櫻の郎　　丹蓉

さくぬたよ心ハ嵯峨ふあるものを　　仝　上

まくて咲りの山櫻の郎　　仝　上

櫻ふハんなりある山の名よ　　仝　上

いよ〳〵惜き花咲りふ　　仝　上

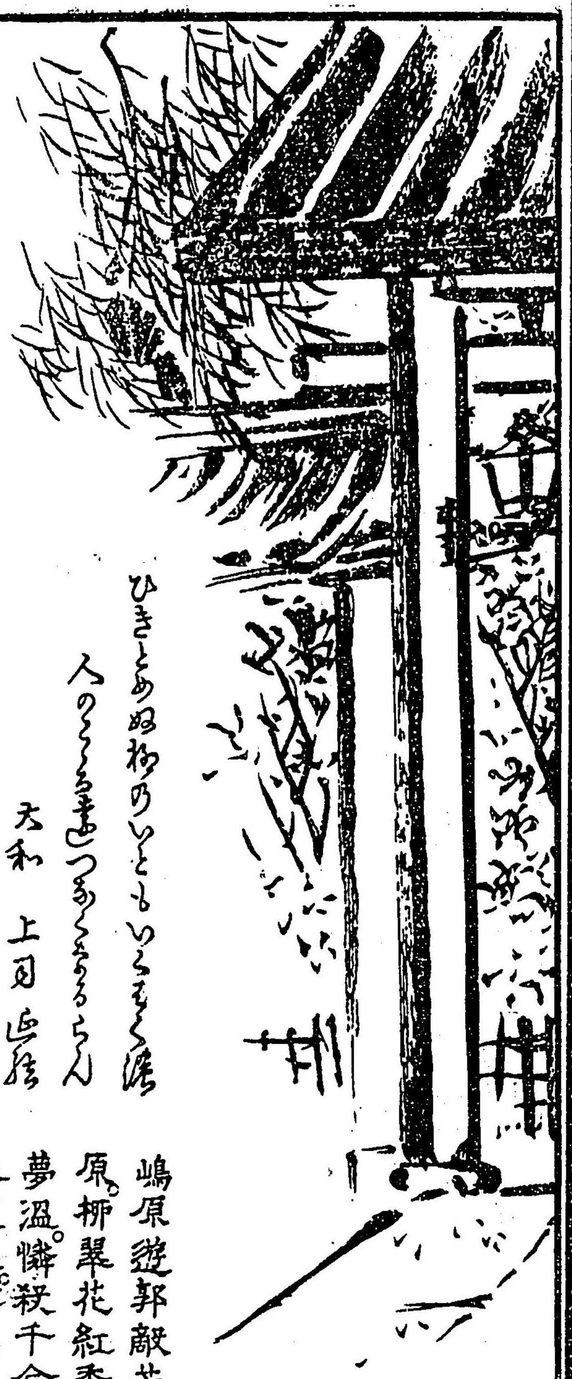
春風吹出白雲鄉。愛見嵯峨爛熳櫻。似雪似霞遥似近。如雲如霧暗如明。東台佳色難爲弟。南岳韶光應讓兄。朗日昭々相映處。都城士女醉將狂。　増山丹蓉

愛見嵐山春日輝。櫻雲一簇吐芳菲。嬋娟艶訝王昭女。窈窕嬌疑楊貴妃。堆雪淺埋吟士屐。落花亂點美人衣。狂風陣々吹梢急。忽作瓊塵玉屑飛。　仝　上

西京山水自明媚。嵐峽雨宜晴又宜。騷客徙居追好景。閑人收跡脱塵羈。春風爛熳櫻開處。秋色嬋娟楓赤時。吐月搞頭觀吐月。東峯雲霽十分奇。　仝　上

○嶋原

都名所圖會ふ載せ嶋原傾城町ハ朱雀野ふあり此所上古ハ鴻臚館の地なり中頃ハ觀喜壽院の封境にして西口の畠の字を堂の口といふ又傾城郭ハ萬里小路今の柳馬場なり二條の南方三町なり其先ハ東山殿義政公遊宴の地なり天正十七年原三郎左衛門林又一郎といふ浪人上訴に由て傾城町を免許せられ一の郭を開きしなり地名を新屋敷と號し又柳の雙樹あれで柳町共稱せ今の出口柳此遺風なり其より十三年を經て慶長七年ふ六條へ移され今の室町新町西洞院五條橋通の南にて方貳町の郭なり中に小路三通ありしにより三筋町と號せ六條通今の魚棚なり西洞院川ふかくる橋ハ傾城町の入口にして此の時かけ初しなり今にあり又室町五條の南西側醞匠の居宅異風なり此時の忘れして今に存せり又寛永十八年に今の朱雀野へ移さる嶋原と號ることハ其頃肥前の嶋原に天草四



ちの牧咲く陸奥山のそれまでは
都大路の花の盛り

東京　水嶋　菊吾

碧漢無雲夜色空。湘簾捲盡玉樓風。
月将語處花将笑。興在艶歌嬌舞中。

武蔵　関根休葉

ひきとめぬ柳のいとも引くを流
人の心つるるらん

大和　上月　岳

りうふ人のまろうをまもるとそ
ひくも出口の柳なりけり

大和　芝　葛順

嶋原遊郭敵芳
原。柳翠花紅香
夢温。憐殺千金
春夜短。棲鴉啞
啞一消魂。

武藏　關根休葉

嗚呼ら奴鳥
嗚呼ら数
お後　喰風

あまり呼ぶや
秃の一階から
ウラ　仝　上

郎といふ者一揆を起し動亂に及ぶ時此里も爰に移され騒しかりけれど世の人嶋原と異名付けしより遂に此所の名とせりと云々

島原ハ七不測といふ諺あり社も無きに「テンジン」あり語りもせぬに太夫あり堂も無きに堂筋と云ひ出口を入口入口を出口上の町を下の町下の町を上の町と云ひ傳ふ

戀ハ貴賤の別ちなく色ハ貧富の隔てなし煩惱の大ハ逐へ共去らぬ菩提の鹿ハ招け共來らぬ真ふ恐るべし靜軒先生の著作せる江戸繁昌記街輿條中に前人句あり云ふ前雁ハ高く鳴き後雁ハ低し高低相呼で長堤を度ると唯尻の動くを見て足の動くを見ず人をして足なくして飛で天涯に行かしむる者ハ街頭肩輿是なり其群集中を雄奔する巧ふ避け妙に讓る肩以て群を撥ね真に虚邑に上る矢を縱ち矣を追ひ奔逸絶塵衆皆尻を仰で瞠焉をり知らず都人事ハ奔る何ぞ多き此の如き何ぞ急なる此の如き東郭西橋奔走烟の如く南坊北街經緯織るが如し士にして馬せば此の急脚を借る僧にして錫せば此急尻を買ふ何の法會にか參ずる（原註に云ふ尻を買ふハ僧の杖介）轎夫駿足を貴ぶや後る夫ハ凶なり百歩を以て五十を笑ふ前輿に軼るを以て雄となし走て禪解れむ則身走て手結ぶ慣ると雖も猶妙なり或蹶て趾を滅るも血を躡で雄走る爪を拾ふに遑あらぬと今ハ昔ハ引換て新流行の人力車何ぞ多き此の如き何ぞ急なる此の如き何の變事を上る何の法會ハ參ずるぞ四方八面曳き來る心ハ同じ流行の思案の外の色の道親も妻子も打忘れ牧野の會にあらね共期せぬ會をる遊蕩冶郎不夜城中の人盛り桃李の色迷ハざる無く解語の花醉

ざるか〜花街の樂み柳巷の興樓上樓下銀燭漲り絲竹管絃春海の如く歌舞吹彈聲沸くが如〜其價眞に一刻千金にして四時皆然り獨春宵のみに非るなり古歌に思ひきや枕にかたを肱さへ城傾くる力ありとハ」實に人をして魂飛び肉散〜む嬋娟の佳人媚を衒ひ窈窕の美女情を賣る丈夫も之が爲に志氣を失ひ豪家も之が爲に産を傾く古語に曰く亂天より降るに非ず婦人より生ると豈恐れざる可んや豈慎まざる可んや

わたつみの中にもあり佛もろ人の夢ひ　車聲轆轆往兼還。不夜城中訝別寰。急管繁絃春似海。
よるるゆふ嶋原のさと　婚歌妙舞興如山。千金雲散田頭裏。萬石烟消瞬息間。
居玉ひてゆかしくてゆかるる梅橋ひとよ丸　寄語青年遊蕩子。休將大志換紅顏。　增山丹蓉
つもりとなれたるるうん　仝　上　一去一來忙送迎。島原郭裏客縱横。無窮色海有窮貨。
花ぞやゆ京花街中の人巷り　丹蓉　有限春宵無限情。用成句　楊貴妃如含笑靨。李夫人似轉
花ぞやゆ京花街中の人巷る梅の路　仝　上　嬌睛。東風滿地黃金樹。解語花開不夜城。仝　上

京都繁榮記　終

丹波の頃倍增山を沼る正月さ義よ東京名勝恵河
は著ありくそれ名を嘗〜あり今まる京都
繁榮紀を著てそれ今余よ余ひ〜ひ〜ぶをもる
余〜まつ備さ見るる翁う優絶なる獨得れ者を
以〜京都の名所古跡を横さいぶ〜ぶ〜ぶ〜ぶ〜ぶ
人をして旧都の昭媚ちる山水を探ふ
のなひあ〜ちあ〜ちあ〜ちる淫快なる者づさ〜てそれ
人情風俗をいふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ〜ふ京人
ふ接ちそれあるもをなる〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん或ハ頃を

解[illegible]妙あり[illegible]
[illegible]東京名勝画帖[illegible]
双美の称を得んと欲[illegible]
[illegible]浪華松昌記
[illegible]又葉八道の名勝を[illegible]
[illegible]名
而の[illegible]の知遇を辱[illegible]
丹後の風日記作東都の僑[illegible]

追録

八阪神社　山城　澤井東涯

朝向芳箋夕硯池。東山無處不詩思。落花啼鳥雙林寺。髣影釵香八阪祠。

北野神社

蔽日妖雲全掃去。皇威所及仰熙々。前狼後虎蹤蕭寂。鶴舞鸞和菅子祠。

仝

春風陰雨霽。盛德放和光。松竹千秋色。梅花万古香。

清水寺

四隣人定萬峯閒。一脉鳴泉聽初奇。似得耳根清淨訣。古松巖上月昇時。

知恩院

早櫻萬朶客爭攀。法雨慈雲春不閑。滿寺香風翻艶雪。遊人呼做小嵐山。

東寺

秋風吹霧萬峯晴。得々來尋古梵城。塔出初霜紅樹外。門臨十里碧江平。
高僧揮麈談禪理。騷客吟詩忘俗情。最喜棧花香滿盎。黄昏又見月華生。

仝

五重高塔絶塵喧。吟袖貯風雲際翻。滿目風光自蕭索。秋深三十六峯昏。

圓山公園

蝶去蜂來香萬株。淡霞深處小禽呼。春山似黛花如笑。人立天然好畫圖。

仝

花月滿山圖畫真。紅樓翠閣好相隣。皇天至竟分春福。半爲詩人半美人。

四條納涼

滿江人影万燈紅。淡月依稀楊柳中。忽覺紗衣如灑水。鐵欄橋外坐清風。

仝

樓臺影落夜涼平。分袂橋頭夜幾更。嬌女如花手擎玉。瓦斯燈下賣氷聲。

嵐山

絃歌樓上酒如泉。渡月橋邊棹碧漣。驀地春風起山角。飛花亂入美人船。

仝

羅綺舟中湧艶歌。更扶雛妓上前坡。櫻顏未老柳腰緑。奈此春風無賴何。

島原

水晶簾外夕陽斜。起步前庭恨轉加。紅袖翩々追蝶去。金釵觸落海棠花。

追錄終、

明治廿六年二月廿三日印刷

仝年仝月廿七日出版

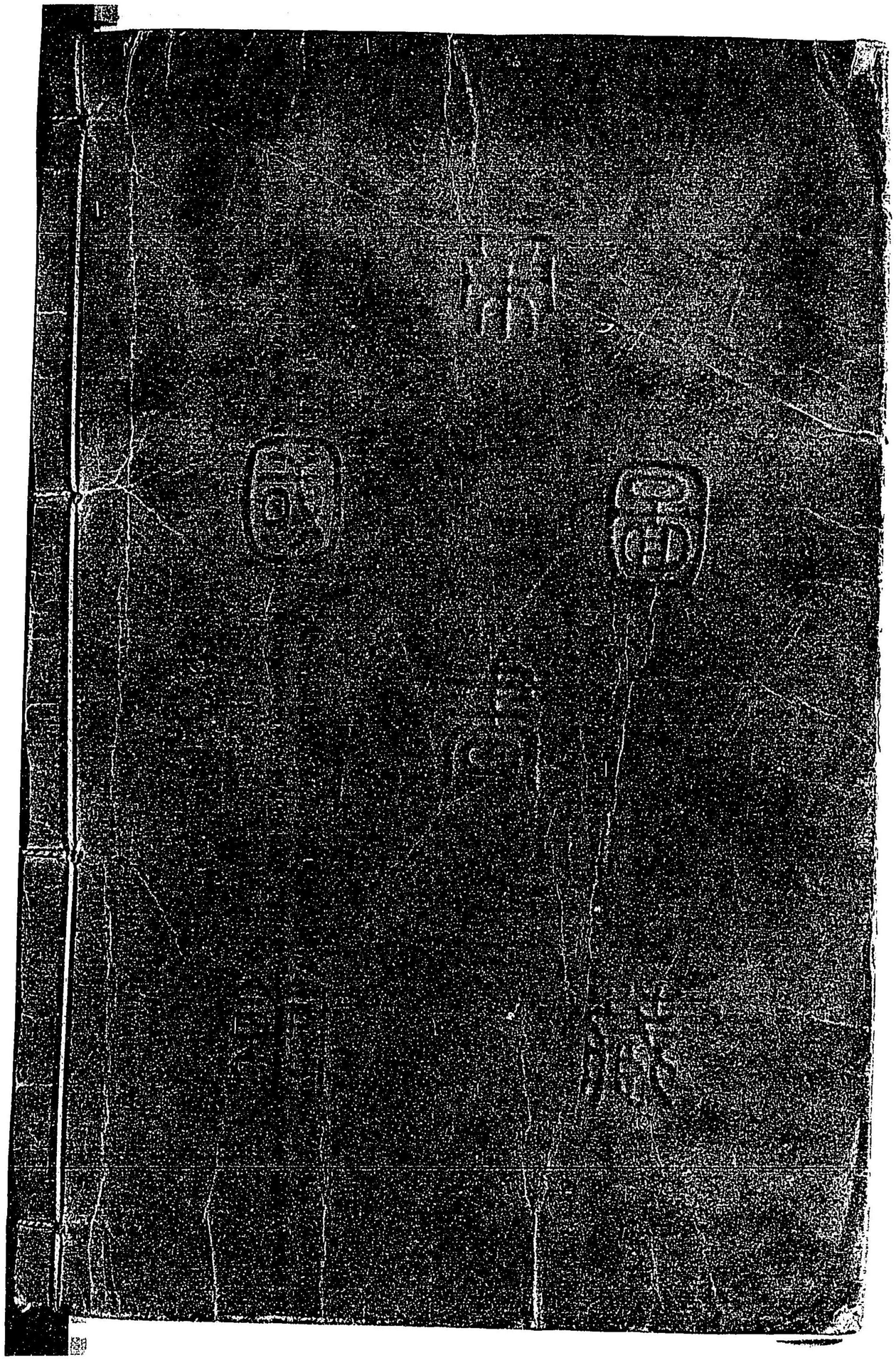
定價金參拾錢

編輯者　京都府士族　東京市神田區駿河臺鈴木町十六番地寄留　増山守正

發行兼印刷者　右仝族仝番地寄留　増山持正

彫刻　山口唯女

16
160



16
160
Ⓜ

025339-000-9

16-160

京都繁栄記

増山　守正／編

M26

ADC-2775

金匱要略

16
160
Ⓜ